

○語次

このむにまほもつむと中風そとをとやまうりきとハ被
下をのくよにえをひゆみの体縫たとすます
いふわきかくうきりれよりてきたよ歌とつ
ちうきをものへまくあんふまのがの我と
まほ物をもあまきんとおもひうとそくはうのくと
ながとけのこくふどうくつう次のまくよう人のまふ
かくめまくいふかくまくまくまく

文久のとうめおまか月

たまく
雅道

源氏物語語釋二之卷

藏書

○若紫巻語釋

元文庫

あぐくか 初丁 雅集 梁塵秘抄口傳集 十おこうくぢふとくあぐく
オ うてありくか 新 韶 うきうするえうそハヤクとあんく
左のぐく あまくかまくあひなど為一うりてハ瘡のあきぐくしてやあくも
せんくあくか 釈 彼種の従為一癡りてといもきてるハヨク一頭マツす
ごくく縮 い癡きの従かく瘡き とハリくくとハリくくあきをう
満 うくるくね學ぶを習ふとくもきびくねく高車小原とくふきくも海民君
かくの山をあとの歩行を馴らねあき おもむくくもふくく小准へかべ
所せん歩身歩く 同 細 河海云ひくをくもく 通れ只せんくらくあうにあ
かくくへあたきぬ 釈 此句末ハまくくふづくれど
仁見も所のうり特りくくは便民君ハキシテ身歩て下ざれりのうりくか
まくせくくうりあうもくうのうめを所役歩身とくく俗小キウクツナバセマナを
りすあくかく又所ふうりてハ行脚ふしづるごくくひうたくよりくもあくをきハモナ
の度くかくて餘地の行へあきうきう所役とハリくく歩きうあくをきけてとくべー
所役のさ とあふく

レジキ

二二〇

めせども高光天の御子あどやくもと日知とハりゆよとてゆるふ漢國にて王の徳あると
聖人とりそとりて日知よ聖字を充るよりゆうて後あひとアモトハ聖とりみてものごと
あきらめどもモリハレシテアキアキアキアキアキアキアキアキアキアキアキアキアキ
モリモリ又セ字を借く聖人とりそとよつひよハ行徳ある僧をつよ名のやくとあきら
あきらまきとども傍ハ位あきらめのかねばいとしごくもととあきらめゆくもととあきら
まきらまきとととととととととととととととととととととととととととととととととととと

大
之

國朝要覽曰僧史鑑云是
唐代宗大曆六年四月五日

すらやかな

河す

ももく世俗よ飲ひゆをすなりとひよ
もかく 拾口本紀第二十四皇極紀云以水送飯うつゆめ也よおのまとすきてとひよ
餘藝院のうつや
あくまむ事
ややび
四丁 河 寛ひろきを地窄虛空寛白氏文集引
才 及の大あみのややびりんあめあくら波のくら
らん 岐 私えにほのくらわくるあもあく海の面めんわくにせとく
いづくらわくさくあくハモのくらわくくばりゆだ
ややもとどりくふの六帖れきくよハタケぬくとくもれをとく
えだいのぐれとりきくれど現本大川水のとあくれをよだれをく下ふいづくとくも
新方をたに波のゆくをどりよよ寛の字をゆくとくひ会をくにややびりもやくくにひく
きをりあとも カ
新方をたに波のゆくをどりよよ寛の字をゆくとくひ会をくにややびりもやくくにひく
きをりあとも カ

1

卷之三

集解
川水の如く
ふあきを
あひて諸おそれやまよの御をとるはいりあるべきやうがみよりのたらめどと
ソふえのやうびよハ全く寛大の事とひやせざれどハ何のつづきやうびよありぬと
いひてばゆびよあひてあきあらと論かゝまわばこゑ寛大の事とてハ不寛大モカナりゆ
浪のうらんとつありてやんせぐれんといあくすや寛大ありて授せある所ある
ものうちふ浅きせよアホアホは、とそとそとそらんが、とくはのちびきとくもくとく、はのちびきとくもくとく、はのちびきとくもくとく、はのち
らんとねよびよハあくさくべり結々ハあど波のうらんとやくよ將ひくる例の解あるを
さきばされハやくよ不寛大をややびよとくもくとくもくとくもくとくもくとくもくとく
わくハ狭小あひめのとつあてよあて結るのはのうしんふかげあひてますもくと
かきほふツンボリトシタと譯し、とくもくの解あるもくとくもくとくもくとくもくとく
とて海の面ハ廣うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とて右のうれ二句を大にのべとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
さきば拾送よしる。」とくもくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
湖月の写一選あるとあきとけー
いはくとむすぶ
五丁 新 そとたハ神代
ウ 紀ふ崇字と訓
さすて忌清イキチヨまくらて敬ひ崇ぶをりゆを本とて大切タクタクふむタクタクされば、莫ふ集
よほもひ兒とよかうる、とく大切タクタクみタクタクてりてりてりてりてりてりて
かうをとあるのをふかぎりあひみくと
けりとむすせもうくともあ
此字のまくべーあむハ辞少ていふもむかのたまじよ内ノ又じ廢事態
あざれ字と出して日本紀海名文選が記されるはいりある此字が字あれさハさくふ

○語
歌

○未摘花卷語釋

行はぬはあん
の無氣あはれの真無氣あはれいふとまやかのいとあだちしげのなむにほうふとよめ
るも暮あは無氣あはれのまくらのまくらふとまも風うきまくら
ゆきまくらすりまくらあはつひざまのひざまかまくらのまくら
ひざまもまもまもまくらぬといふまとすぐてめぐらまくら
くらひざまづみドきりふひいちひじきまきまくらまくら
よ一あくたど云がくすて上ふ
柔やうじたをつゝゆきまくら

所訴言垂仁天皇卷又曰棲遑不知其所第七此事秘說有孟河傳小日本紀を引て進退の字
をひりむを可むと御處もすまくの避退ふすけて據思もく云々商討皆もまとも云ひやくあらに
ろいひりどりや進退かのを云々おれどもまとも云ひやくあらに云ひやくあらに天文八年五月
十二日於議定所講讀の時此中をヤクヌキ新 あまびと先のがむとて御へ万葉ゆもほ様ゆまの
ぐくとすよとありばるのちとしもおのがむとてきのとづら且まじん辯のと想へておもて見
玉をすまふ所すまひておどりぶせきとてきくさくわみのとくとおもなうぬれひ日本紀ふ棲遑をもとを逐ふもと
すもと又多ひいとやもとひとるきとおもなうぬれひ日本紀ふ棲遑をもとを逐ふもと
少もとあるとそぞろ云々下畧狀 あまとの御の事とある事ともあれども右の事のとふハ餘擱
あくとや近づんすとね考へて河海互津の邊捨ほふ未くとくがと一新御の邊何事とこれ
たるすまうがたイナ 否もひ否もよもよとくとくは津もまつる邊もくわく又ちまことよ御のとくとくと
くとくげあくとくもとくやくくち。まかでちもとくとくは辯さればの用ともすきてほほ局ハ上あちとほほ下の
志を済りどきのさむを決くべきだめくちくべくじづもほてよもく捨ほ集本居石翁のゆふづ
ヨカハモ。またわもえとくせひゆじあまれびひりうごもとと
あくとくをふれりかんをゆくのとくとくせられまうなり
起駆セシモキヒアドリテシズスアリトシト始めて何もその事ヤソラシナレを特テシムもあき
ゆもとあきよもソウ朗云お居の邊あやちとハワケモナウラチモナイと狀 右の説づるより
以テも傍の事ヤソラシナレモアリハ文のとなくゆハ
ノイ文のなきとせもあきよもソウヨリのあにまふんこも
かふん。本居多聞のとくとくよもと新井ふるまれりあらわすがお居のとくとくの壁の
たり生國のとくとくをひきかまくとくとく

○紅葉賀卷語釋

卷之三

八丁拾

河清萬葉今般万葉ふほの字
新井洋之
ナサヤカ

卷之三

わからぬ。どけぬやうであるまじ
か。トサのへきだらけで御て

さくあらの或様
うねと上ふけ

の活を

方を失ふけれども、よき人間は必ず
その年を失ひ、失へば必ずそれを
のぞむ。〔譯〕サツハリ。ハツキリ。

久保のそ
りすねを付

雅集
帝朱疏

中華書局影印
卷之三

〔あがて人のそばに
あがて人のそばに〕

あらわし

わくもたまへる二とく社事のとてあ
まよじつらひやわくかねのと本

かくのまよ
雜集小抄
こゝも書いた
うふとあると

子河孟
よめと
上の筆生
ひのわく
うの筆生
ひのわく

やむと物としてアリとおま
すくの事なり。あはば今全
キをいや」おきてひのきをとく
の因縁かどりゆきまことに詠へ
二呪咀のうよみを 拾今接日午

今 日 着 事
すゞ 行事
年 て し
ふの す し
紅葉 の 実

かくすてあきあきあき
かまれつまもくわであつま
ぐくづらひあつま
かほじてあきべく

日本紀古事記

事記の
勝てば

まく善惡ふつひて折もとひうる
の法度ちよの比へ河海の事例
もあり併勢物語ふ嗣もたきこ
めあらまやうれぞえとくしけん

卷之三

かへりきつべくい
御 祇 徒 や 紀 領

ひとま
オ

十五丁 拾 日本紀小間の事とひどり

じきそりふの北略語次らもかた人の

きみてさうきをあらべてあらげあはれ
かわせ多くもくわざれど其の梅比花つゝむ。おうらひめんとひも必人まとくはねゆや
なにまとせやれど其の梅比花つゝむ。おうらひめんとひも必人まとくはねゆや

餘 朗云此身もやうり人間もして坐也

狀

捨本氏の元より人間のことを譯人、見えて

ちこくろ化鬼

同 花

ウタキのつくらふつへのあみもくわり

餘 梵冊子の名

いじていじかく仕あん極きとあり多武於集たまへふがくをうけてよしもあがむ
のゆややあん谷川士清云列子注小疑心生間鬼とうらぐく正法念經小間羅獄卒
非實有情以衆生妄業力故見之とあり

按 やくふ列子を引くハ林希逸が注文たり

といふ謂能かひきびだくゆくとすあくせきをかべ
くふゆひけたるくわうソササ待つておらまくつうくわうたうへ沙石集三老ひま
くわうもくらで狀 古今序のくわくふ列子漏あり條摘小引るくわうとく圓をくわう服ひく
責るやもまわゆづくばれて後あくつやうあるきと捨ホウネルゴネルグズルを

いふゆく、とも源氏君お對してよしも女ぐくの物から
よやくまくへく候むとくね。。。や政客ふくわう

廿一丁 新

新古今集序ホテ
ウ 菊の美

の一面れ高めてひとめんべよろづらかくふようてこくふもすゞてんかもよだくふもひくを
うきとくまとくあくほん餘 古事記ホ表許と書日本紀ホ于古トあれどもとれの語を
ひあくば唐さんとくと語がゆうの語をくふひもひくと記記ともお後事小をゆく事教ら
がく代綱もおづくくるをうらべる谷川士清後ふをとくもと國の名と傳漢南蜜傳ホ鳥海

廿二丁 拾

遊仙窟推の家種方
ウ 家とくふすまうよう

の人は車幸く見て驚くまゆりといひ秋 右の説もいひと鳥海とく葉あ
なうの知りたまゆの多き体で英りきと馬海のちんはと物まきことあり少満嘗
てくふまんひなうきぬあとまくて情あみてりべーせんとくまね應神天皇紀ホアリ
亨比後をかくばんのつまく後もくのまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
かのまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
めや日布紀ホの御恩引かくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
めぢすやあくドモやくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
たくひやーきまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくバカラシイ
アホウラシイ

内 拾 盆 献あり今接上のとを下のとを湯りべーやくくとゆす
きもあり家おちうありあがくほせんくうかく給ふく事

あくア程くとあるべ程もくらめてくまう餘 万葉歌の七種類のくわゆるみのをうが
く形取とまうきうわくくもとあとのくわぬ万葉八刻のとくとくをくわゆみせでうりく
ちうくく新 万葉ふわくくくも取ねくみたの車の歌をわんが追竹をくわゆみせでうりく
御へよくうあくア始の危近きとくくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
家守く遠きまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
とくとくじて生かくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
の偽常めてもあまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
こくもあく出でて生かくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
の財トウヤラワルウンタラ 強の事とホトンドとよし
昂毛と落ヘアヤフキと ナカキまくまく

○花宴卷語釋

狀
其註ふ事はあまらせを禁すれどもあくびもあてて浮蔭の側へあらぬとある
ひまわりごとへもありをのぞく。さきとおゆみとおゆみと争ッ
ひまむ
おゆみよのさくわ
卅三丁 拾 日本紀小安措をおもかへとよあり勅旨たゞ仰て
オ 乞 河無面之細 面つれをまきふをおもひて 新今接るま

○二ノ九終

雅譯 賞翫セヌ
猶のす。めざりそり

雅譯

貴翫セ又羽

卷之三

かくへもかくへく

三
五
七
九

まことに此を以て之を表す
事あらずカケロフたゞの内方の如也ありさま
ふさりしねやふるひ等もて 雅譯似合ス相應セヌ

莫若

同雅集

わゆる。俗ふ大ヤウ
ルニ同シ。わゆる。

アトナウトリシマラヌ
ぬるより 大サヤカ

校正譯注源氏物語餘釋二之卷目錄

若紫卷

はるひのよしむら
三丁才

ちんこう
ひらまき 三丁ウ

まわらへあそぶのよまやま
まん四丁方

卷之三

きのまへに五丁ウ
あづまとすく

未摘花卷

吾郎大廻七丁才

ひきものと

あらねやくふん人あれ

よこまハ丁ウ

さくも九丁才

くくのくわく

あらきぬの九丁ウ

さくふ様ゆく

うふおき

花宴卷

南歎のさくらの宴 卅丁才
やまとにすあれど

柳花苑 卅一丁ウ

きくえだぐくもり どれそ

とのへきせりくけあり

女しこくちかだま

神にあらうのきり 卅三丁才

ひじれきりのう

さんわんびりて 卅一丁才
まほよへとくまみ

ちくともえやうべ

ちくの廟をくのまくね 卅二丁才

そくうるる

春の寫 卅二丁ウ

桜のかほすのまかく

扇をとくわて

校正譯注源氏物語餘釋二之卷

萩原廣道纂注

○若紫卷餘釋

わくとやく 二丁 餘續博物志卷十二云瘡鬼小不能病巨人身故曰壯士不病瘡晉
才人云君子不病瘡蜀人以疫瘡為奴婢瘡秦漢故事云昌意

子七歲七月七日死後為草鬼著人為瘡病故為童病 宇治拾遺十二物一閑院大
字廢冬嗣三位中わくゆくとる時りくら病とむりくらづひりくら詔名とひふぶは敵實

とく持征者あんき病よくわくおとくわくとやんみくとばこのおとよのくとんとく

けくよ 訛 けくよとくの名のよへ右ふりく秦漢故事のうとうむくづく

けくよ瘡のわくゆくうど記をくするハ御くふるくすくとくまくい

かおとせんめい少山のひづかうひづかみのくとくとくとく

がくすといふ所小 四 訛 けくよのわくよ万年集方向南山小くらびくとくらぶく

が共よをぶくろの京より北の方ある山をさばく山と今もいひくまだひあくべくもあくべく

がくすハ鞍馬寺へとく鶴の縁起あと舉くれくもた小不用の往來をばくとく

きくよをくうのこくのくくらべ

よのひづかわゆく

四丁 新 なゆよすくすくひづかとよ

ウ なりまきどせんとひづかとよ

ハラヨヨコハ源家の大臣子あつらを時の他姓執政のこぶさりへつて臣がハラギもあん
やあくまをくらむとくらむく時よづくもバ内キドラヒムカウで中ねとすく國
守トハアシナムソの上ふ姫の下うへれをアムキイド肉ももんともアグドアの肉も
トキモゼヌイキハひあきバナリヅムナリもあくたどあるを小國ちあて肉へやくつよ
をりてもすめをうづきたゞ末のまぐせまくさんあぐのきく

近謡のやうなす

○前元年正月
任陸奥守即日還昇此外例可勘

細上畧

蔭の中納言中綱と辞して備前守より任じて國にてるよ／二代実録
小又くさり 拾 佐理の太齋は嘗てひあくわれをひいてうけた事や
六丁 細 良清が冠の母の族姓をりて松風と云ふ此族姓の
才 才名くさり
弄 系図より誰ともかゝり但松風と云ふ

良清は、母の姓姓をいふ。松
才子なり。又、弄系園のハ誰ともあ

但於風氣

大井のちと兼明親王のまことあらきがわの侍女小准^{スミ}トとむほざきよや
ハ候^{スル}よりあくやふそとりかくとあれども不族姓の事と考へれどもいふをよ
あくととりひざとむほもすめのうづき
ぎぬのまとりふあれば放逐のまはふハアビシ
日 河濱の國司めまとも云也奉獻ハふの字を止くと見をくりへたり不口之信用^{スル}
ウ人ありやうどハあまけん人ふ司よもよてやうべとえ國^{クニ}ぐ
細 今半^ハで、國^{クニ}守^ム人あごの此國のちふ成て入^カくらむも
きてをと云やびりて迎へるゝもあづなと
餘 上の文あくじてんをうけていづ

卷之三

ウ
ゆ

大和高市郡より三代實錄卷四十三宗岳朝臣木村等言建興寺者是先祖大臣宗我稻目宿祢之所建也云々彼寺推古天皇之舊宮也元號豐浦故為寺名云々

釋 北畠守郭が催馬崇禪の入後より豊浦寺の行裏抄を考へ云々元興寺ハ名も村の西

南久米寺へ行方ニ在豊等寺内也昔ハ四方ニ四門ヲ建テ四ノ額ヲ掛タリ扁曰東門ニ飛鳥寺西門ニ葛城寺一本ニ法興寺ト誤レリ南門ニ元興寺北門ニ法滿寺ト云境内方北二町余最坊

舍數十宇有シト也今ハ僅ニ二間三間ノ瓦葺ノ御堂ニ御丈一丈彩迦佛ノ銅像一体昔ノ餘波ニ残リ云々豊浦寺云々是也」とる云々又大和巡路記小此寺の記深とて右の数少々を

餘波ニ残リ云々豊浦寺云々是也」とる云々又大和巡路記小此寺の記深とて右の数少々を

二四

えをうめきんとあり又伊勢集よほくあらわしのあらじふのかまく
ざくらぐくをねもせんかうは祭のまちやあと今くいそとあて
ゆくと源注拾遺新紙小字と
さくらみだくさくと

あのかわらべもとづか

わづみはるさく

北卒
花酒處小
才
少

嫁娶記より「行うる處すらの店もやうが假令此の店を二軒ふさをうてゐ
うそりひすぐまちを」てやまと人馬船と一帯ふく葉り、ひまきあとのめくはみを向
馬船とあそくさうてゆひりく頭をゆくとれどもと引不い、あらわせ也。新花の説
まとだきべ、雅亮装束が小女郎となり
王氏の嫁
七八丁 河 王氏が今嫁也又云
、正生ともぞうと
解をあぐのみ、ちばく黒いとあり

賣日本已曰纂集王

卷之二

卷之三

河王氏也。官婢也。又云。
八王姓。也。或云。八王姓。

卷之三

卷之三

のうかくもとめどもあらわぬ

କରୁଣାମୁଖ ପାଦମୁଖ ପାଦମୁଖ

うつすれのまゝのや
よ在と後よしの道へすハ古今集小二首あり又暗^{クラ}ふをほ^ミ義^{アゲ}よハ湯^ミとくみ花ハ古^カ志^シ尔
く^ムた説^{シカ}るいひよセハこのを説^{ハシメ}すにうくよセ^{ハシメ}るんよハ^{ハシメ}も
湯^ミもうもくめ例^{アタマ}をちるあ^ム人^ハかる説^{シカ}る^{ハシメ}る^{ハシメ}る^{ハシメ}
餘古今集雅下のべれよみをのくとあるくぬ山^{アシ}へりんよハやぶ人^{アシ}
や^ムたり^カせ 和名抄刑罰具^一錠^{アカ}加奈保^ホ太^タ之鑄足具也
あ^ムる

の
道

丁
細
七

おきにひうち流をよせう 拾今秋其處

さあよひの夕

が納めらるゝへとあを拂ふは浦とよめふくゆく又えも集よかのものくるを
西行よりあらうかとぞうせばと小舟があとそのうどるをそそぐわされられ、萬が
小舟さうやわのくよてあとまきをもぎるにをそぞらさるやうととよりうきをあ
そそぐやもくあわゆくよしをきバ古事記とも武雷神達御名方神の御よとをのぐ
若葦のぞくとつて万葉第一のうに葦ア足痛^{アハラガセ}吾勢とよみう別ニ之^ス断えも集
ようくよよきハ甚岸アマシマツシマ小舟さうりうらあうべかぬくらみくふのこ
よりく紀の毛れうち浦とぞりゆくをべ一返すふやまとくらく化の名ふをもてても
坐まあるま^シ 拾細物^{アマサタケ}無^{アモ}一よみくあうべあくま浦小舟よすうちはの毛アドモモモ
あたゆきもせうつ帖アマシタケの紙よいまうお勅^{アマシタケ}御集アマシタケも一ふびきをり
ちあづくはとへ後接集アマシタケもとよみくらみくうがの浦はもとは立ちあくとうわともかく
もとぞうり^{アマシタケ} 拾^{アマシタケ} 拾^{アマシタケ} わね^{アマシタケ} 拾^{アマシタケ}
若行とりよふも今あれどあふされよくあビウ

○若余尺

二五

按考のうちより少しきとよひふるわき方策が十一婦人門のうりを草あぶ風吹
とくふあるとん日中でふけらるふのうちよりゆるべ一 狂この後考のうちよりよきとよ

त्रिवेदी वाचा विश्वामित्र
विश्वामित्र विश्वामित्र

蒙古文

拾
芟
草
下

日 餘は撫あふるをうなづいてまどきてそくめをあ
くへるをこのひひやうひをうわさりじと

おふじのからすおもてを大和の船にうそおうとおひりの船を
おひりの船を出でて船を出でて船を出でて船を出でて船を出でて

万葉五
すゞもあくへり
あれば
かうへり
とそへど
ふさぎりぬ
のうへり
ふゝに
障らへり
す

●日本琴アをあづまとよハヤト東遊のうばひくより出で名を
東園のひよえとをくくうてかくすむるこめうの深ふむえてやまく琴アとよざ

いふへんりひぶあかに東とうよりひよこはいとあうぬとこくれづぶ白國の固有のむらあるものを 河あづまハ和琴の惣名もれど又東調とて秘曲あるこ常陸すハ風俗の秘半四

首のやゝこ東調少てせよをうづと今世あらへれへゝゝ
花和琴ハタケ小箒カツキ撓片カタカギ披とく絃樂
催馬樂小用ヨウすゞぎを二音拍子ハタハタよハタハタととりう又爭アシガも毎樂曲

絶かくを夢観と云ふと
■一禅は後人の時ハ未だ歌のことを高可尊■最凡
夢根をあつて其の音をどうぞいへてさづれたの秘曲と云和聲のかたちを擴たてあつて

てこの姿小ほくれや幸せとまひらへ親行許へ和室大丈教豪状云あづまと
すゞくらむわ國をとほくれよとあまよひくるむ半よしとこれ故氣食てはらめど

もあづまくやの名ハ和琴をだたゞわやにへども是ハ東側とて道の秘すよでひひも
みそ因とてとくハ風俗の秘半四そめ内室一ト也りづまくあづますぐをみて風俗とハ

うきよとてふを今ハシケテありてトノモモカヒシソレをあん人ハシヨコする事
てはけさんともちる渡御林モモタミ行阿云若菜上宗柏木忠督のすがくたまると

あり其のふより二室竹がからむあぐふちくぢひて、ゆくありべーとくらをもせんび居とも
菜上の向と肴合さり

文の事はむづかしくてよめどりで東西がほんとあるが
あづまふ。トシモアリバニシテモアリバニシテ
アリバニシテモアリバニシテモアリバニシテ

追加
もとよりこゝにかすみづくらうてうく
三丁 駅 中島慶之の海人びくす御ふ云原氏ね強
才 の文よしもとゆきふみ地の詞ありくこの詞より

又くわれのうらとこびりておうげこの善ひを詞つゝきの甥大うへはくよくこくせんを
まくわづくうりゆくくせの詞より人のわがうちとりふ詞もあらむハくのうらをいふ詞よりせふ

うやうやしく人の口からかたづけられたりてあり。さればお詫び文法の
まゝそれらのことはあくまですべてお詫びへきものと見てよせらる。

御のあくよまくせしわざをもとめかの今俗がも人のれよくせのあつてあるとらり
あゆかよハニヤウのをもひるよめづくうづく行徳あるふとあづくせをまくとも

らぬよき事なりやうどさう体の様ふ何の事あやふもこれで
かの有るふやあごいれゐるふりあるはまく考へふがうれ今やふをい

〇二六

さうたふあがぬとてかのあぐもまへるゆふめ文も出るを既小ぢえを取せ
る後おぞもをひきりへばいとくちとてよねつ。おうちふうすく見清ヶ^{ヨコリ源氏君見清ヶ}キヨ其御心ニナリテ云
れそそもとあぐくわうこはるるやどちにいとよもゆるうみかくゆすむくふらひあそ
るハアビウ^{根アリ}との地^{アリ}まくばらく地^{アリ}ぬまどおん泊^{ヨウ}セキウ^{ヨウ}バ^{ヨウ}あめもとく
この説いとよもくわきばほのぞきばくのわふくわくうすくらべてこひふくらう源氏
老お復^{スル}とくても達^{スル}ふくわくうれとくくもだふくわくうれとくくもだふく
問ふくわくうれと
くもだふくわくうれと

○末摘花卷餘釋

此人をもどすとひづりがゐて、もあはせば今よもやまに生む事無れどのゆゑ
かくお捕ふるはせうとのめくまへむすきの令嬢がるをりふ父君の許を里
ゆてといひ下に父のち浦おもてわらふと便りにかへりとひるハお捕ふと聞す能事
曰くおみも仕べて人あるをりゆ見すとあびへわらじとむと成あどもうござりト
なまふらぶや又令嬢がる唐衣小角の事も此縁よりてあべーり御母がる
里ゆふやうとひづりとあつよそれと何ともいひててて父君の許を里ゆぢ
かふとててきふやびてこひらむれとゆゆはる父君の内父おもて唐衣を
ゆくもとすくはり又下に令嬢がる氏のあやふ媒もくもとひるふ父君ふも
くもよハ人のゆびすれ媒もくもと父あひハりゆくとひるの年あればかく
ことくとくあざきだされぞ必お捕ふのはせうとくゆくふたひる文
もかく又お捕ふの内父おひづきあひ本どもちどいつかにぎますかも訪ひく
人ちはせうとお縁の先のとあつよしとひるてお大浦がるのりはおもつむを
よもいふもとひる年とひるなどへはせうとおやくもよもとひる
ゆきまくはれお捕おからくとくのひくあくも又いふざや
新 説いとよく考へしを
くわり業よまはるをひる縁の先ハ此無縁大浦の先出家せよあふかく
きやあんさてかくもとすめくらん人のどうあらせ此はやくこゝとくわく

記されても中一筆
の文法やもあらべ

父の手本とおもふ

孟赤猿の父と
拾今猶此観

上ふりくも無事ち浦ありやまもと六井上ふ本萬のすあくそりうどきやうたう
又此說のぞくあくば在考甚もとほくべきやうか一又とび取爲さう 新下父文
のち浦が思ひかうど行くもとほくどりよひく令姫いまく母のゆきりはななど
りゆをらむ得てまくあくりどよふい先一うきりりく汝ふ妻へくゆき文例やてまゆ
住もつうぬあくハコふハからちくで只父のち浦が方を里もとびきぢりをもとせんくうな
かう実ふ王家統あくぬと尺くて下ゆも大輔の恩とあくとびがくふ父もとくすも

ウラモチヌミ

新編王氏大守小任之類聚三代格等云
天長三年九月六日官符云應任親王國守事上

國常陸國上野國々々の後就まは仕せり候おふべく抄どもヨハ或ハリあく
きあぐて矣もアフ 花光孝天白王承和五年正月任常陸大守其後貞純親王代明
親王え長親王も仕ト候ミ 明考續日本紀第五美和五年正月庚申朔壬申四品忠
良親王為常陸大守徒五位下藤原朝臣貞公為从 駕この常陸國の大守小仕セ
キテ親王を常陸の皇子 いま一ノ也
三丁 拾細流の後アホ仕セモアモリヨ
オぬり候もんハうみてるがくとも官ととよも

あくどさをあ

あれはやう人であ

四丁 河 カのありれまくらよとあひし六帖御のゆきをまくら人のあまみぐふいは
ウ ごくもくちもくちをもすくべき 湖月引ハつぐさきトアリ。餘 今や六帖ふいとある事

11

1
i

卷之三

才士

二十八

手と口で此の毛を弾子の如くもひらげてゐた。さうして臂ヒヂをかざして見ると、其の毛が吹き飛んでいた。

十五丁 狩枕冊子

前後小
翁より
伴雄
号たり

本とて此あはれに冊子もどもひらげあるをりう
臂ヒヂをかざさとつゝはせうるさくらひほくあらぐ
きわの下よみ月のゆきうじのやどもふもくすらゆうごめのまへ二間あら所とこあらう
らひほくばまひがくあらめもとくともとくとも秋後撰集よ少林傍小加とも又拵義久のひんぐのむさへ二間ふくまくひいお
天の下よ代よハよ代とひのアトとよみのひくふかくざうされ 禁秘御抄云、二間 敷疊二帖
北間向妻戸敷阿闍梨座半疊一南間如御講之時懸御本尊寄障子也 真俗文談記
云二間御鏡毎月十一日辰一點奉拜之給嵯峨天皇御記云 每月朔朝御代鏡奉拭
之伯督所役也著淨衣用覆面正月朔無其事除夜勤仕スル也 日中行幸よ清涼殿さう
ろふ額間をのぞむくされよう南のうへ間スルにうり二間のまへぬれまともうの様
ようけくまくあどくゆ一箇も二間ハよくスルのあへ必もくわすく宅神スルをあり
或ハ仏像スルをもくわすくあふはまくしてやくら内裡スルハ仁寿殿清涼殿
小ありく御簾スルをもくわすく又佛像スルをもくわすく侍従スルをまくせまく二間本尊二間供あど
諸記録スルをもくわすくしてやく但一重スルをもくわすく役スルをひあふはぞと齋舍スルをあらめ財小のぼくかく
の鋪設スルをもくわすく末搖スルの里亭の廂スルの中まで二間うくらうの二間はくわすくふ末搖スルをもく
ほくを廂スルをすくわすくまもあらとハ閣の中お隣スルのまくまくお院のぞくたうくべー
いとほくまづふねびれどくそくふももあらむとくざりうりうばく

日 玉 も。ど。の。湯。か。く。べ。又。上。あ。く。つ。キ。下。が。ふ。か。が。れ。ど。の。ど。ハ。む。の。湯。か。く。べ。玉。補。え。と。
小。梯。か。あ。ま。ど。も。の。き。ハ。ま。か。そ。く。べ。か。の。ま。ま。と。よ。う。ん。と。ぞ。や。く。折。今。あ。に。補。造。の。後。れ。

廿一丁 河誠又云，達仙窟長一尺八寸，舌四寸八分，律書圖云，又云，尺八為短笛。玄宗皇帝前身為羅漢也好，吹尺八被贊出之。見聖僧傳。

四之豆々美今按細腰鼓有二二三之名皆以應節次第取名也花禮記曰鐘鼓在庭琴瑟在堂延喜四年三月廿四日覽舞樂左大臣時平公仰令推大鼓階前自打之云々大鼓ハラハラ堂下ニテウム但寛治五年五月廿五日殿上競馬六番之時主上塔川院自打大鼓給此時置堂上也

まやあんとさへーとゆくらでまぐれがふをむかへるを人ヌ腐といひて
ほんとわざがあはらもあらねよとほのうひまつどに今姫がふをあく
よ權キアリひもあくとひまふべ秋 こゝれ腐りてのまこと令姫がふくと止あくと
ちくとをほきの腐りてちひとをまくとけりの辞かくせく切くひくはく
もりくとをくとづかでトモアタマへのふもあくとふらんといふこと
我らを懲くと、ひとかづきをすまへ、別あらまくべとまくとくと
あくとひと

九三 河 御其臺。秘色今比茶烷松のあせ也。秘色事。今之秘色磁器。世言錢氏有。丁ウ國。越州燒進。不得臣庶用之。故云。秘色。皆見陸龜蒙集。秘色。越益云。九秋風露。越窯開奪得。千峯翠色。秉好向。中宵盛沆瀣。共枕中散闌遺杯。乃知唐已有。秘色。非錢氏為始。類說。今無秘色八瓈器也。越州よりしてやうゆく。其色翠青也。

〇二九

て御事すゞれり。仍テヨリと秘色にて尋常小不角之左是秘色。ト
暦五年六月九日御膳沈香折敷四枚瓶用秘色。うちやのね修云ひそくのつを今より秘
色ハあどき茶碗のとづひを云。〔拾〕五雜組云。陶器柴窯寂古。世傳柴世宗時燒造所。
司請其色。御批云。雨過青天雲破處。這般顏色做将来。然唐時已有秘色。陸龜蒙詩。
九天風露越窯開。奪得千峯秘色來。〔同〕叙。あるの小袖あるのぬをりへもたらべ
さうでハ神牛産ふのれふ白衣をぞ後

とまくはあればハキハキあらわ小袖のまゝあらわちびくをやひ付梯（はづき）をさへる
なごみをうながすがき下ふ肉付（にくつけ）をつらかの小袖はあらわううの老女はゆゑ
あらわすむひよそへ

集解の古記よ褶謂似婦人裳也褶訓枚帶也とりひ今抄小今私案褶著襷上也今禮服中所謂裳也とありてやす法をも褶裳裙廣五尺二寸腰廣一寸五分長三尺三分と記されり今も即位の附ふ名をもる裳と多あることありさてこれらハ男子の服ニ婦女ハ褶と裙とをきるひとくもあらずて褶ハ深色裙ハ淺色あつより今小兒もとくもあらず集解の冗小女褶服裙上耳とりひとく跡小婦女服褶裙謂男褶表袴上女褶先着褶而纈裙表而褶下端頭也とあるあくめくもす法ハ男女ども小兒もとくもあらずと今京とありて後ハ女もあべて袴まく半とあくとより礼服みも袴と裙とのもろくて褶を股る半ハ停らもとくもり續日本後紀承和七年三月丁丑朔の詔ヨ一裳之外不得重著トヨリトモり生きてともあらず行をもとづくりとくも延喜道正式より凡婦人袴裳不論貴賤一裳之外不得重著單裳不在制限とくもとくもありさて裳の製もやうりももあらずて後の裳とりづねハこの褶と

領巾とを合せくつくる。ゆゑもぢや申今の裳は大腰とくもハ褶の遺レタマリ腰とて大腰より下レタマリ腰とて肩をすゞく胸の毛とて結ふ紐ハ領巾の事とされハ古の褶裙の製表とハりく遠ひくからて褶ハ多る時もありぬりてきよハ裏服とあらト下レタマリの女レタマリよれをどめ歸すてもおとけざまのをりあどし袴レタマリをもあくしあもべーさるりとヒラミとつ古名もりくらうせてシビラと呼えくもあもべーシビラハ下平レモトナの略稱而て褶のひくめくとくの名うそくタ白いの新ニツ此丈カシコノ頭眉ニツ全義を無小枚帶也ニツとあるゆづうこれハ上小門ニツの集解の古記は文又上裳とて裳の稱ふひくめあく絹をすくゆくらうもいきと上裳といふありち裙下裳とハ褶のゆもあくとやうくまで褶ハ推古紀十三年天武紀十一年小元えくも田訓ヒラミヒラオビとありてシビラとノ訓ハアミとて和名抄す宇波美とぞと能もくり梁塵秘抄よ宇波母レタマリとびくとびくより褶ありくも女房飾抄レタマリもびくハ上裳の事とりくも右の沿革をよくも考へて源氏物語の唱ふくとてすつけ小説レタマリのあくべーさづれもたひよハレタマリ芳樹云穴レタマリ上ニ引タレタマリと跡云レタマリ古記云女褶俗云引下裙レタマリ著裙中著總之裙也との説ふよれハ裳よりも下よどむわの河海レタマリ延喜式褶覆袴レタマリ之衣也とぞとくこの袴ハ張袴レタマリ也とぞとく張袴レタマリのうへ下裙レタマリのうへ下裙モをも志比良レタマリハ中古の俗称るやとかば此今えあるいあくも志多毛レタマリと引べきよも志比良ハ下枚帶レタマリの畠語レタマリあしんう志多毛レタマリハ脚息所レタマリ付サ房のゆうてこハ褶レタマリのうへ下裙モをも志多毛レタマリをも志多毛モ正の姿レタマリ人め拂ちよそのうへ中古より裙とも裳とももくらく小裙とりあひよも志多毛モも志多毛モ中古の裳ハ今の裙ありまして褶ハ裙の下レタマリもあくも志多毛モ縫殿レタマリ下裙モとて和名抄下曰裳レタマリとりあひよも志多毛モ然る字類抄下褶ウハモ名抄下褶ウハモ名抄下曰裳レタマリとりあひよも志多毛モハ男服の事あり

女のハ下ふるきのをふりハ志多毛といひ俗よハちびともりハベーこの物男は用と
女れ用ると一字兩訓でまづのべうべうこの二氏が既よてこの爲めにあつてあるとあるベー又都毛

おもむきあひをそび仰る。

おひが小松お

湖師
おこれでとひ坐りて御内侍の事あるべ
ハ吉原にて今やくはせぬるあくべにまく
度石持小禁秘御抄小朝餉セ房皆トツ
三位以上、釵子計也とお生バ陪膳ハ弊を上
草体と云ふうきて柿ハ弊を上る御み
さくわのあくべにまく度石の形をうかがふ
あくべにまく度石をうかがふて柿をうか
あくべにまく度石をうかがふといふ難小人をつぶべ
さて此膳位の比とあくべあくべのあくべ
あくべにまく度石をうかがふといふを
あくべにまく度石をうかがふといふもさう度の

みどりのさくら

內考序

内教坊在大宿今のだよりを以て大内裏すあり
内教坊のまつり候すもとを 岐女房の禁事とあり

續紀孝謙帝天平宝字三年正月饗
樂寮而後教諸女房也妓女者多叙從五位下也職原聞畠新拾芬抄云土御門北堀河中右記云嘉業二年正月七日內教坊舞妓別當右中將師時傳取皇帝玉樹万歲樂桃李花

喜春樂五曲畢退歸

因竹所

同
禁秘御抄云近代者如內侍不候內侍所上古者多以溫明殿為局階梯云本朝事

始上崇神六年己丑始制溫明殿以三種之神器安置此殿後代之内侍所以右之

溫明殿表始也某花也危也枝也木也不也木也

卷之三

1

卷之三

けびみてひももあくわうり拾芥抄云内侍所在
温明院又感入首月所生殿昂郎女宮司疾之

ゆ
う

七六 河圖之卦

吉川元和

卷之三

日美
ちのからとひのくに
あらかじめ

本
考
究

卷之三

同弄細

卷之三

大
事
記
卷
之
四

卷之三

ハゞすのよめナヘルトモスベー 花きみの次第フキムの上ヨウジテシテトモス
す法ハ次第ナムトモスル所也 猿猿バ赤拂のうソギハアマニタ表テ此トヨリのうちルトモ
アヤモウナヘミル **釈** 右の法おは西院とモリツキナガハヤクニシテヨリアリ
ラシテルトモリハ源江の年をつく上の向く成スルシモテ一ノニシテルトモリバコレハキムカナ
トモスルアリモリナシテシテアリシテルトモスルアリモリハ此の年をつく上モアリスル桂を
キムの上ヲガキヌテメシテシテアリキヨハアリサルトモスルアリモリバコレバモスリシテヨリム
アリモリゲンシテシテアリモリハ必小うちミトシテシテルトモアリバコレハシテ
禪アリモリアレバウムセ説ハアリシテトヨリカミシテ上ヲアリジテシテ源江オトモシテアリモリ

さて又あざうあうくわきとあるハリハ紅ゆもあんじゆも年をあがバ多ひりのくされど
ゆうくもみゆよヌをあぐれんとハいふあらやうなうきバシハ皆としゆ役小ぼよ
べくや
あん かるきみもとまぬ

天寒奈九秋月詩詩のひを家の猿ふうめり
也捨きまふ云ゆえ安子ふうきんうそきぬをす先サ將入を模川よす
とゆきくふはまりとゆきくバニのうそきぬハゆをあせぐんゆく
衣うれちもあくよ袖ハぬきつゝ六帖五どく
花江次第云昔蕃客參入時重明親王乘鴨毛車著黑貂裘八重見物此間蕃客總

10

THE HISTORY OF THE AMERICAN REVOLUTION

卷之三

以件表

領持來為重物見八重

大慙云々

漢書

うえあひどひハキト
セキサハアフク
餘考

りあきバコのうきぬぞ風ふせぐん **箋拾**
貂ハ說文鼠属大而黃黑尔雅翼貂实鼠類故字亦
ありうべね名をびくのや小六尺ぞうりのやれ

のうそき

あやのうす付くことより
藍而色濃也と見てゐる

きくはつとせむとそぞ造小町子壯襄すよ
秋山川正宣云凌雲集より御製吏部侍郎野美聞

使邊賜

表
歲晚嚴冬寒最切
岑守遠使邊城王事
風牽不加寒聖美閏八月

忠臣為國向邊城。貂裘暖帽宜羈旅。特賜銀之方。
古來稱无監。長途馬上豈云闌。中畧唯餘敕。賜裘。
即チ小野。岑守あチ妹子を因高葛野を賀能の都。

の外貌が

れど 才 あきこておやと
批丁 花 体無温ヒナヒナとい

不思議の事だ
どまのハとて何のめりへ
わうきゆのいえ

かげてう
不蔽老女
句のあり
消ふるる
火の事小
説をば

べきしらべ
餘此説をんぞ
体無温といづれ匂を立ちぬ
ハやと赤薙の船をむすひぬ
くまくつまことあら店ゆうゆう
あぬをきく
わきわきうる
いと

さるたゞとすのが、もあき、ばかれをくらでかくらと、うごく。
ほく後小河海がの一草をあき、ばく文をもくとけり。ゆくをどく、
釋 本文の「くら」と「あき」を
「くら」と「あき」に讀む。

今やうもあらわ
頭をかぶるべく

セ三丁
花房の聲
ウ
桔子肉紅豆

梅十二をもつゝを皮のアツクモチテウタノ今
やう色やトヤクリうたやね度ニコトノトメ
テウタナリモカシマリ

今素お持のことをりてきとハシル事もあ
れ又こゝもあらむちよひのうもく
は比ひできるもあらバ今やまことへいへり大略ゆきと
西ドリミモウアリマドク

河 独色今極色也紅矣也見延喜式御、巴也今也因紗紅矣也とひ紅よ

俗より當世色といはんがごとくそのをとり小流行もさうきのうふして禁物の本ふハさうふ
すれりさきばなも小物はひりでまつらるるをあきだ今ねどとハリととあるハトウシ多きと

濃紅よりお赤よもやみの赤きをひそめふゆきかへり
柏木春よもやみ
色ゆきみびきの山そどもまたあら今まくもさうともありバ今まくもハ

かあともあらうが、ふはあくで其をうの邊にもとりてゐる所も、一氣に
のどくなく、べつておき、どくは紅の今夜もあくとも、ハナのうち丈がふくらむき、う

きくあらすじてひぐとえみるまへあうためにくるとたゞあられ、古めにくる
とあはれのうへ

日 河 表裏同色の濃也。是も舊俗矣。花上より今やうもハキムトウニ
田

まわふそへきりこぬやの重衣とひそめど上古ふはうむおりて紅の重衣もある。〔**経**今著紅

の直義れま所見分明あくとどき、妻良よし、五ヶ村
はやあくふみんとひままで、ハキヌのまことばあらめいふるといふすくらときりて

なうのまへひくよりは車のまへにまゐるといふをまのうすとて
まうだれどもあらじまやうあるかられ是今案のまへ

とひかえども一句みてまわぬよりと考ふるに似む
大畠かくのとく御を松殿装束抄 紅直衣連綿也 法性寺閑白直衣布袴紅梅織

物直衣紫織物指貫皆練著之寬弘四三五法成寺閔白左府行曲水宴主人著挑
花直衣柳色指貫山吹色袴永久三土十四五節童御覽日法性寺閔白紅梅浮文

直衣萌木指貫皆紅衣 **岷** 私云細の糸ハまわハひまやうもを垂衣ハことそのもすりやうだら
とりよめこゆふ箋の糸ハ紅の直衣比例をひきうる者も勿論まわハひまやうもを直

釋 右の説くいづらつてあらめたるといふやうとまゐのゆとかられらるハ上やもいつゞづく語脉切きだしく文をあらげにきぬあらべ必らふすとねといふづくわく古あきらむる唐衣のとづねとよびば唐衣あること教ふべりとぞとさうひくとすやうふるといからを紙の注よりよゐかどのみつまやうたうすれとある説いとよしらしきの事にしてあらやれるとの詞せうがにしきるつやあへためたるをいうでりこうあやうあらんよく考ふべー或説よはうう縛唐衣をうすら檜皮の直衣をこは表東おどもほんそくはうるおもてひくに色の唐衣とすや生じだそれあらむといへ事でぞとぞこの文脉がれてうやうあるとの詞行をばりうるともゆく縛ぶそれまたあらじきそいとならひくにほきよくぞれくらうとあらとぞ縛まつてまく

世四丁 **釋** 此室の内かの事務をよりまゐまらまくる唐衣ハ紅の浅き今やうもとあらじめあらむと曰ゆふりうも深く席くをりあらべー壬ニ集エ初其林のひととすりの才

とある以後の角あらむ後仰はりべー
女房簡入袋辛櫻朱塗也臺盤上有御膳棚二階檣火櫃一圍基彈碁等同殿上中間臺盤東黑漆厨子上置菓子等其南立馬形障子鬼間方奥一間ヲ出テ也疊中并南間紫端長押下二間是渡廊ヲ笠ムル也南有布障子二間北遣戸一間蔀一間常不上二間際程副北立馬形障子西立布障子其外号ス切簾一間懸遣戸御簾二間也抑臺盤所東北障子到鬼間和繪也

半いだん所

日

釋 伴信友翁多良考一篇あらてひと委一く論をりこを要を描くまも

こふちん松本まとくらべー○玉小梅一件のくらみのふとあるを説ひくらみかるだーと復きくるはまくらふさるととまきと字鏡小太良女式小多良比賣と云々後世のまくらふさるべとくわいふねとも注さきばおきこせぬをあらざきバさくよ考ふ小まくらのくらめのふれもあごくうらうひまくハ政事要畧六十七年載ふる衛門府風俗哥よ云ふとくらふさうて其をかひきと下のひかが木桶の鼻が中に小さくらむれむ記を下文もやくくれば多く良女の花ハ紅色あら美若一云中畠さへりくどその多く良女いうふねようとむかうつま此比源順教を集の古本は字をもとに田畦のどら形小歌四十首を廻らうとむべくすのくらきつやのうふをりくふよりふくべのうをあきらをををどかしむだのよほいやとりあぐれり今考ふふみにだはくらめの意もるも紅梅のとくらぎ其ハ内膳式小だくら多良比賣も因物とて漬年料雜菜の條漬春菜料の中多良比賣花搗三斗料鹽三斗と載らまくるこれあるだくらめの多く良比賣花搗とあるハ紅梅の花ふくらの苔を搗とて塩漬うして奉る料あらべー今の俗小梅の苔を鹽漬みて食は飲酒の肴をふすまうとう酸氣ありてめていたれりあらくまく此梅むくらめを美齋とくらめのうまくはうりとて紅梅をもむらはあらきわらうがまくがまくよく紅梅と呼てりてゐるあらきを脚解と奉るやもあ不然申さんハまくがまくがまくければよくふううく多く良比賣と称名を申してあらきある例のまことにやうて式やもと名を載らまくらにあらき細注但ち名づけあらき考へ得ぞあらくおりへば多良とハお稱の苔はあらきを番よ盛るをたまらの櫻はる不らひよはげぬ但くらよりふくらハ踏鞴の幸小ハあくまで埃囊抄よ大嘗會の火桶元三の御茶湯むらたら

かどハ世の始り伏ぬからう冷泉院の御附焼アラヒタケと記す「カラコロ」と色葉字類抄
又鑪をタ、ラとよめり鑪ハ爐と同字と字書は火牀也と注す「カラコロ」の鑪オキのちよろくと
おひきくとての搔練カニシキがあつたを火色とりひきもするもいざらかづくちに比賣ハ此の
うるハーくやうく小よりてきくももつて「此をせめて試よりみ」とさうとうしまくせく
紅梅の一名アラヒタケに呼ふともありて坐くらめといひ又く坐と急てりよとくもなうし
あるばべー・とて云新撰字鏡アラヒタケは草所也反長也衆也姓也続也聚也多く良女ともゆくらめ
くふあげつゝる「カラコロ」あらべくぞるもと字注ハ他義あればをねびゆを考へばくはあ
正字通ヨ草草生山澤如蒲黃葉如草アラヒタケと云ふれどらふ草ともかづく花状カラコロ
スハナム小合カナもと又少様よりもきづるもと字注ハ他義あればをねびゆを考へばくはあ
トカラセモトトグニモ本草のそよぐらきく向試つる本草毒藥部より載る石龍
芮アラヒタケとソラセガシの方言くもぐある中にタ、ラメタ、ラベタ、ベタ、ナベタ、ラビタ、ロベタ、
ライなどさうぐりうじづきの名あつようもと注「此方言の中よタ、ラメタ、ベタ、ラビタ、ロベタ、
五瓣アラヒタケ葉を宍アラヒタケのくわく湿草部よりもく體腸アラヒタケをもタ、ラビとつ所あり此を春アラヒタケ
夏アラヒタケ初つうる生出くのなうそ枝頂アラヒタケごく小向子碎瓣アラヒタケあるよさくねくらきくとちきてハ
似うよひする冬の草本をもくととくの一種アラヒタケをもくとあくらもとまく食料ととべさかの小
あくさくばや考はあげつゝる多く良比賣アラヒタケみも多く良女アラヒタケみも多く良女アラヒタケと明るあり已ヒ信友考
村田春海云字鏡小草アラヒタケを多く良女と注せり因ておりゆ云の多く良比賣ハ多く良女アラヒタケと欄アラヒタケ
目アラヒタケかうり和名抄アラヒタケ瞼タ、ラメとほきう瞼ハ眼瞼のそよぐ渡のゆく病あり凡て草小病の
名をつけて例多一龍膽草アラヒタケを疫草敗醬アラヒタケを血眼草アラヒタケもどりへ今捕ふタ、ラビとつ草アラヒタケ

ありくスガ草アラヒタケの藏了石龍芮アラヒタケあるべ其主療をアラヒタケ明目的效ありうる俗小突目と
ひく眼瞼の腫アラヒタケ病は此夕、ラビの花をとりく撲きアラヒタケてゑび熨アラヒタケて挑げて頂後の
風府アラヒタケとの穴所アラヒタケへもりつゝをバアラヒタケお腫アラヒタケを治せるこればりくアラヒタケとくらめとりく甘アラヒタケすアラヒタケと
く今アラヒタケのタ、ラビあくべー」已上 一篇云雅亮抄アラヒタケとくまくよきるきねのととくあくふう
らうにすくらうをへあくべとがくアラヒタケあくべとくらうをへあくべとくらうを
往てゑくらうもとくぞきとくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうを
二つアラヒタケをくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうを
花アラヒタケ紅の原アラヒタケをふすやくアラヒタケ石龍芮アラヒタケハやアラヒタケとくまアラヒタケ花赤アラヒタケとくねばくアラヒタケ小信アラヒタケとくにあくべとくらうを
室アラヒタケひくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうを
薺アラヒタケをくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうを
此アラヒタケも普根搗アラヒタケ茎搗アラヒタケもくづくとくらうをへあくべとくらうをへ
少くうくらうれくアラヒタケねくべー」とあくべとくらうをへあくべとくらうをへ
擊落アラヒタケてあくべとくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうを
と訓アラヒタケも搗アラヒタケ和アラヒタケくくすくとくらうをへあくべとくらうをへ
る搗アラヒタケとくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうを
りくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうを
こまくらう青根搗アラヒタケ茎搗アラヒタケもくづくとくらうをへあくべとくらうを
中アラヒタケあくべとくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうをへあくべとくらうを

鑪の火と燐の色をもとめよ。試の後もいつてより。お被ふる事よりは、傳りて。爛梅の畠の畠もあらうもあらう。擇きぬるはかくらべ。かくらべ。かくらべ。

人よ問ひむくさん

みりさのゆれをとめやばす

日
歌

千者也 布留 舞茂能
東遊求子の秋のま

也之呂乃比女古未川。興呂川典。不止毛。以呂者可者良。之。どう河海ある春日社にて。ハニ笠の山とある。ハ繁茂の社を。立籬歌。春日歌。倭歌。柏木歌。とりて。立籬歌。春日歌の下小東遊之後。多唱件。故以附出。と。う。道ありきて。其の下は。カ美乃。カ須。カ須。カロガ。アリ波良。二。多津也。ヤ。手止女。多津也。ヤ。手止女。也。手止女。波。和。カ。美。乃。也。手止女。カ。美。乃。也。手止女。と。ある。ハ右のまつりと。同。う。と。す。ハ。洋唱へ。が。ま。の。い。さ。う。か。も。も。る。の。ミ。カ。う。太。加。未。乃。波。良。仁。と。ある。句を。河。海。よ。川。を。下。ハ。う。の。み。や。し。ろ。ふ。とも。う。れ。ハ。或。ハ。春。日。す。て。ハ。ま。方。日。の。余。と。も。う。い。が。ヘ。一。う。だ。が。一。きて。ニ。笠。の。山。れ。を。と。あ。と。か。う。ま。で。右。の。ま。る。の。原。に。う。や。ハ。少。女。と。あ。と。休。る。い。わ。せ。く。他。の。人。よ。ハ。か。き。か。み。や。小。浦。氏。君。の。ご。ひ。え。も。ふ。さ。あ。小。姓。君。の。あ。や。た。う。で。か。う。一。か。う。一。も。も。そ。き。う。一。ハ。衛。門。府。の。風。俗。う。よ。東。遊。の。求。み。れ。後。ふ。う。ず。ふ。哥。と。繼。て。た。う。み。の。ふ。れ。も。の。如。き。を。と。女。深。き。去。て。と。り。き。よ。わ。れ。め。う。の。ま。す。と。や。豆。う。び。さ。れ。ど。春。日。も。ニ。笠。山。も。共。よ。何。の。縁。と。り。く。と。ハ。翁。き。ぐ。一。行。考。め。ぐ。ま。る。ア。

かい袖

日

歌 宮重一 淸云火色からぬくへ男女ふきよつて見る色同く女ハ衣小用
ウ み男ハ下敷よ用ひくる装束諸物のゆりかを染色のみもす

袖は、まよひうるさきの運の移りのまよくして、まよ生もとふきよ。げあるほそとをなす。ども向きむづきあどり。あはれむとがひくまくまよ。あらわぬうふうの移りともある。財も潔きの本とへどくも地のゆとぞ。まうされど、紫衣が御代。御代はくも。波ちゆめと注きくも石事あらう。もあ。ば。と。伊勢貞丈主云。捲絨のとく。中古より詳あらう。と。や。じ。のりひく。何物のゆうか。赤きの手とくて火色よかくして。その房あをゆす。ゆく。やかくのゆく。破る手とから。やかく。手かく。の。ゆく。今。あよ。手。う。捲絨のゆくとへ。あくへ。行く。捲。よ。あ。り。く。手。く。虚。詞。く。す。生。絨。よ。背。く。て。捲。よ。絨。を。り。く。と。明。く。く。一。卷。云。かい。袖。う。手。く。絨。色。の。練。緒。を。さ。く。く。す。も。く。は。か。と。も。緒。緒。の。絨。色。を。稀。と。す。や。う。と。く。か。う。あ。り。と。あ。り。と。向。り。袖。よ。う。わ。り。あ。と。い。へ。と。是。も。某。と。某。を。な。き。バ。お。の。づ。き。き。む。そ。を。あ。る。袖。と。か。う。と。か。い。わ。り。と。う。あ。と。必。緒。緒。の。練。緒。な。り。と。袖。小。火。色。と。混。き。あ。り。と。そ。列。緒。は。や。う。あ。と。か。う。れ。と。後。手。ハ。附。令。の。緒。も。う。り。と。出。事。も。る。こ。う。と。廣。道。云。右。の。説。も。あ。と。は。事。を。考。て。い。き。と。今。ハ。不。き。と。考。き。つ。か。い。袖。ハ。伊。努。め。の。説。と。く。練。緒。よ。う。よ。う。名。な。る。が。後。手。袖。よ。持。う。も。く。但。左。の。緒。よ。り。か。い。ハ。う。と。と。それ。う。緒。緒。の。年。よ。か。い。と。う。よ。う。一。か。い。や。う。ハ。遣。て。破。ユ。ハ。あ。と。お。と。か。う。と。か。い。ハ。書。つ。く。と。捲。作。お。い。あ。と。そ。か。い。や。く。と。う。後。大。

朝ノ誤丸
御四ニベレハ
日本紀二見

てあけより **衆** 岐江よりれども文もやうてひとごとくとがまとうさるやもあくよしや
さう、巴写し脱きもひとぐあどりも此あらはば俗謡ともとくあくが
そとととおまくろ **日 河** 天武天皇三年正月朔朝大極殿詔男女毎別闇夜踏歌
女踏歌、天平十四年正月十六日天皇御大安殿宴群臣酒酣奏五節四舞更少
童女踏歌是濫觴也 **餘** 聖武天皇天平元年正月十四日始有男踏歌
よろくかられ天平十四年云えこれハ續紀よりて正月壬戌の日あり五節四舞とある
四ハ田の字誤あり舞の字以下小訖の字を脱き是濫觴也れ四字續紀の文小があると
あ **新** 踏歌のより新歌もよも説あれどわざとく
かのこゑれどもくつかいつて注さればくよハ略く
翁七日帝幸白馬青馬の精考ありと長きバ其の文を約めて大ものをくふほんとくく
かすとぞべー○彼考よム正月七日青馬を歩駕アシテ幸ハ万葉集よ水鳥乃可毛能
羽能伊呂乃青馬乎家布美流比等波可藝利奈之等伊布右一首為七日侍宴右
中弁大伴宿祢家持預作此歌但依王會事却以六日於内裏召諸卿等賜酒肆
宴給祿因斯不奏とあくと書ユアマタ始あるニシテ此事例よ依と小聖武天皇の御
世天平二年正月七日ゆくとせ本これよりち小始きくよ其ハ詳ちくべ又モ後おほく
行もくアシテも考るふあきどうげどく恒例よ色葉字類抄
尔本朝事始をりく光仁天皇宝亀六年正月七日天皇御揚梅院安殿設宴於五位
以上已而内厩宴進青御馬兵部省進五位以上裝馬とあり河海おも此文を引
て此青馬始也と注ざきく此事續日本紀よハ哉らきびて弘仁内裏式正月七日

あら白馬とあらう年の書より始ハ日本紀畧村上天皇の天智元年正月七日癸巳白馬宴アリと也くを終るて次々皆白馬とまき、やかの書ドモマク家カニ記シモトと延考より
後アフタの文アフタよハ皆白馬とちく青馬とすも六シシをもくある事アリ、さて是カニ白馬より更カニする禮
年中行事秘抄ヨウジヒショウ正月七日白馬事十節記ヨウジヒツク云馬性以テ白為本ト天有白龍地アリ有白馬
是アリ日見白馬即アリ年中邪氣遠去アリ不來アリ、ひづる方カミの後アフタよさアフタ小據アリりてのあアリべアリとて今ハ畧カニ
きて本アリ日の式アリ弘仁内裏式アリ左右馬寮引アリ青馬入アリ自アリ近明門アリ云々度殿庭アリ近衛分配
前後アリ毎アリ七匹アリ前後アリ寮官人分陣アリ出アリ自アリ延秋門アリ訖儀式アリ左右馬寮牽アリ青馬入アリ自アリ延
政門アリ其アリ行列アリ也左近衛左右各五人前行ス左右馬寮頭次アリ之アリ青馬七匹アリ在アリ中アリ次アリ
之アリ左右寮アリ允左右各一人次アリ之アリ青馬七匹アリ在アリ中アリ次アリ之アリ青
馬七匹アリ在アリ中アリ次アリ之アリ右近衛左右各五人次アリ之アリ江家次アリ小
左右馬頭度アリ次アリ白馬七匹アリ次アリ左右允次白馬七匹アリ次アリ左右屬次白馬七匹アリ次アリ左右助
次アリ右白馬陣度異アリ次アリ白馬經殿上アリ前アリ金名門明義門仙華門度御前アリ

大いからずもとづけのもと
批八丁 拾和名抄云鏡臺弁色立成云加々美
ウ 加从此和名あきどもとすう音小いひ
なまきくらよや今もむりつゝ又云嚴器俗用唐櫛匣三字加良玖師从
みうけむちろんてもとせハ類聚雜要抄よどくかづハ梓を入るト
小豆ゆ唐とうもひくハ形の角あきくをといふと古ゆづげちどりくハ奈き筋あくし
ゆくはりく共の度不ありづくより波トあれぬあくびくをせ様ふくら
造り方をとり

此花此一段の句説をあり一よいほ此のむくわきつる
きぬともれ中よかくもうふきもつうくふ今えで
けうあるさんほく
雅亮装束抄幸慶上のうづくやよゑと此ねのことをうりハキのうづくや
元服とせんせんと櫛上昌ハさうどううハルシビトモキバ恒よもあら櫛眉るやあら
妻役は昌只婦人の用みゆのうく主とハ解粧と收くめあらべーとひづうさもや、りくじ
二櫛掃耳決在折立身納三寸八分丸鏡台一合在鏡在折立とてすり櫛たがくくげよ
いづくわも大うき回すあふやくとくはいづく由よりあん安やす康くきとハおもじくくき

おふくよハシモトハラクハま構の方よあくらきるはめづれしらひまふこ
きハ未だの方よもとそらきりすこ新涼ドクマアセサツモをちかくいはく
とほのちがくよくでぬあす級様のうはまきむといち。見ゆれば今まがおまかとま
なうあふまたよしうらうくわくとあやしくてあくまく
新新湖風もまます
もくほかむじ
九丁 **駅** 女ノ歯黒
ウ えん詳 カ び 堤中納みゆはよんひまくと
ほくちよふあくもくろくとて眉まくねをみじびもぐろあさくにうもくきくあくと
つけまくびいとあらうたまくこのまどもをあくゆべよあいきふくとある文の駅

ぐうハ俗ち小キノドクナとひよるてこゝハ愛の飾りて立ちあつたがくふくら
ぐうといひてゐるやうでりへまく裏起世をもあつてあらまお施の事かう

○紅葉賀卷餘釋

朱雀院

一丁 河 朱雀院ハ三條朱雀也是後院なり古今集にも朱雀院とある才

宇多院の事也脱屣のはハ此院小門を有す

箋

代この事

唐門朱雀院小門よりを承平の唐門を朱雀院と申すありてようせきあひたなり

承平の唐門より延喜より後の本名よりハ此紅葉賀時分をぞいのあとひだる

訛拾芥抄云朱雀院累代後院或號四條後院三條北朱雀西四町四條北西坊城東

とあり此あ處は朱雀院とやむほれ門ハ相應帝の唐子は帝の後小門おさをもひてこの

後院より後院よりてやもと今とく別とぞひ混ふべくもいづみの事かくても

仙洞院をもして後院よりおもとまとばありやまと朱雀ハく院の号あり

行幸

同細 岷 蔡邕云天子車駕所至見令長三老官屬親臨軒作樂賜以食帛民爵有級

或賜田租故謂之幸 餘 蔡邕云ハ獨斷の後晋灼曰ハ漢書高帝紀注より

幸也故福喜之事皆稱為幸 餘 蔡邕云ハ獨斷の後晋灼曰ハ漢書高帝紀注より

天子の行幸之所より幸福あるもと行幸とぞあり 河 朱雀院行幸之先例

延喜十六年三月七日辛酉行幸朱雀院有法皇五十賀 同年八月廿八日行幸

同院詩題高風送秋韻 康保二年十月廿三日行幸同院題飛葉共舟輕 花 この朱雀院の

行幸ハ宇多院の唐門よりを承平の唐門よりを承平の唐門より

當時朱雀院とやハ寛平法皇の唐門よりを承平の唐門よりを承平の唐門より

わみぢのじよかきめしよべく此より一院とやむとすみりち表すれゆつよなづく
より相應の唐門位にゆく一院崩壊の事とばくは寛平法皇へ垂れの唐門崩壊

おひで後かきさせあると
新 宇多天皇御代名

卷之三

日餘瓦葉集

よ樂詠一卷あり。それよもよもハ輪臺新樂管絃時連吹青海波此曲昔者平調樂也而兼和天皇御時此朝依勅被遷盤涉調曲舞者大納言良峯安世卿作樂者和迩部大田麻呂作詠者小野篁作也とあり。新三位の人舞よもよも古くも傳わる考ふべし此時よりはふは後一條院治安三年十月十三日道長公のうへ倫子の七十歳の時經道公の右兵衛督陵王まのをもつて一年宋元ぬ脇よアヒヤウテモソトマハ公卿補任よ寛仁四年從三位同年内正月正三位とえゆきとぞ治安よもよもとふ三位なり。もとより

カタマリ

ウ

河聖主天中天迦陵頻伽聲清華妙容伽聲勝衆鳥云々或迦陵頻賀或曰迦陵嚙者梵語

也唐云教鳥

此鳥鳴時音中轉苦空無
殼中未出聲微妙勝餘
音若天若人緊那羅等無
能及者唯除如來音聲

我當正鳥

帝樂我淨土也。細翻譯名義集云此云妙聲鳥大論云在法念經云山名曠野其中有迦陵頻伽出妙音声美才者是名之曰妙音鳥也。

卷之二

波徧々然と澄んでよかゝる人
波引波体也云々と云ひて人謂

卷之三

10

—

ゆきをきかとがくすみて立居かつてとハソラ舞よハ立居をきびとれよよせくら
つけ居るふたうくもあくすくじどもさひゆくあもれとアレシテトモ万葉十一立居をもくわ
ざもあきびとそども拂よつげ移バ間使もこだ日十二立居をもくじにまどコラムアラ
りまくまくまく土ハあそびも日十二引もそそひ居てむどおゆ紅のあ素すとしにあさとざと
河**海**の城がけうぎよをきみてすやう下文の匂よお令ぬすは傳承ふくらむだごとく又
竹浦よ細流を毎トくるハさくまくされぐから人のとよみよくハ家人のやうなまことりよ
なうがくといづハリマトヤ又のひすよ拳くうじあおれおれおの装束を考くふさぐう
きくめにうるいでくちとくらとくらきをされひがとくと捨毛の説ふくとくの遠きかとうと
めてといい事よハ立居すればそよくとくとくハよくとくとくをじやうくともねりひ
出くといへハひぐとくとく大うよハとりよ次の匂よおわりぬきのまやねよく考くべくふ
りくにあはうたん
おちうんもくもく
かくやくれくまくへ寺じとくかくべえ
日**細**此樂
ウハ唐の
樂とも袖を引くまよをりて御よ后を立てよもとほのそひまく義日花左
右のかれりけををまくあせまひくかくくの神すとよみまくと原氏の女房をもく
ひくもく
あくとくよよみよくとものと

細
后

ト地あり 究きさ

ハシマリモトハ

樂も無事ながりよりを以て後を立候事也と謂ひまじき。左
右の案内りけ先をそくあせらひくわんの神事と云ふと曰氏の女郎をもあ
らう。御所に下ばるがゆてもと

曰細 后の下地あり。裏きざれりひよとが
しませばかくやまく。后と
あらじともうまく。義友は、いをよん立后のまゝとほのそひまく。まともに今をつぐて
后よあらばと云ふ事もとく處ふのやう。紫明抄説もあり。御らべらべかひてもとわくを
あきてとある時て當時后といふ。あらばとくといふ事也。新ニハ唐樂高麗樂をりけ
てから人の多くとよみかくるをりひ人のみとまでとまへ此トあるをかくしてゆが

卷之三

新ニハ唐樂高麗樂をより
此トアラホビヤカツテヒシガ

やうのりもんを云且まくと儲戸のあへれどもあきらめとあく
らきくともとすまぐ先づりやうとある下の所よ左右の樂れしきめとあく
ちひくかゝ人のとよきうやうにいはるハまろとくめやうれど既すふもりくとあく
年少の盛うき代よあひうすやんとあたかあめだたハ左と右ハテの轟とりふぞくとあく
まよとあうもぬやうやふもづきそき知きえふうげばうひとりふとさふこすとくわゆぞく
及びとふかくにさる故事あとの侍うてまう朝のあすなきうちをあくとよくとくとくら
たくふくのううきりしすあごたうり歌よ尼さればこの詞をみづじわよく考べし
めいづけ

四丁 盂埴代也敬固也埴よちく此内よく紫束をもよる拾今案孟津

ウ の況かうつうか やうて下にあすなきうちをくよりかづく
いひあくと吹うてまうおのまるどもよあひくね風もくとみふひくとすてひまよひえ
河後云もちちくの由谱スうく尋花えうく此役のどくちうば衆人をすべて埴代といひれ日本

紀立歌場衆歌場此云宇多我岐續日本紀云天平六年二月癸巳朔天皇御朱雀門覽歌垣

男女二百四十餘人五品已上有風流者皆交雜其中云々又稱德天皇由義宮よく歌垣

を仰覽ドくるとも記さう行列きくとく垣のどく

なまをとむ極とつれ今埴代とくは是あべしき

いづく

四 河 右族也華族

也又云右職

孟 有職の人諸藝小まくて人体よいぐり生でのく 餘 荷田在滿云有職とかく文字義も
あくやすゆり有識をつよや雅言云右職の字なるべく前漢文王傳より選郡縣小吏

すやうやうあると漢書ありハ選舉ふつまく、りよきとすやきバあれりふとぞねぐ
ゆう有識の字相應（トヤナク）からべー職字の非（アホト）ありよりへもやう多因義後ちくもソノイシム成
中ちうごくの衣服調度をあくべ、字向の号（メイコ）とよきあぐく
いづれひくとくとてぬほふふくらハ孟津のびくわんえく

カモカモのむせまく

まくまとわく 一五丁 河楊氏漢語抄云頭花（カ佐）之又抑頭花抑ハ冠の角よ指
オ も也結（トモ）蓆（スレ）を拂半者（ハーハル）者（ハル）多モ發（ハラフ）を拂とすしれ
參議藤原伊衡（タケル）翁（ウム）代（タメ）のすゑすもかきぬあくまくをうしろやまくもかくつて
宗（ムロ）不（アシテ）お清云治安二年十月ナ（ヒカル）百敵（ヒカル）の（ヒカル）長公（ヒカル）の上（ヒカル）雅信（ヒカル）の女（ヒカル）おきがちくまかざ（ヒカル）の花（ヒカル）どもこづひもろ
かねの（ヒカル）おれを（ヒカル）をたくしてこのまんじうちがく（ヒカル）延喜十八年十月九日御記云女房
侍前菊花盛開（ヒカル）此夕更衣命婦藏人等相集頗設（ヒカル）小宴（ヒカル）云々中畧臨明左衛門督折菊
花奉（ヒカル）抑頭（ヒカル）新類聚國史（ヒカル）桓武の時樂（ヒカル）蘭を抑（ヒカル）とアセテ此葉ハあぢ
ぐうまかはあくで菊をりよき（ヒカル）抑頭花ハ上古の髻華（ヒカル）ヒアモドウナリ（ヒカル）髻華（ヒカル）も上古
直ふ髻（ヒカル）よさうさんを冠（ヒカル）の上（ヒカル）抑頭（ヒカル）とくとくあく（ヒカル）ハ推古天皇の朝（ヒカル）唐（ヒカル）の冠位儀礼を模
トキヒ（ヒカル）所（ヒカル）の事（ヒカル）とくとくあく（ヒカル）日（ヒカル）本紀（ヒカル）とよく後（ヒカル）大う（ヒカル）けり花（ヒカル）を用（ヒカル）
らす半あく（ヒカル）とき生（ヒカル）とくとくあく（ヒカル）おう（ヒカル）風流（ヒカル）の爲（ヒカル）うき（ヒカル）バ真（ヒカル）のわ葉（ヒカル）菊（ヒカル）とすもくつり
なやくよとく 一十丁 河金谷園記曰為陰氣時絕陽氣始來陰陽相激化（ヒカル）為疾
ウ 厥之鬼（ヒカル）為人家作病（ヒカル）黃帝（ヒカル）岐防相氏（ヒカル）黃金四目身著朱
衣手抱梓楯口作儻（ヒカル）々之聲（ヒカル）以駁疫厲之鬼至寧歲除夜為之文武天皇應之
年甲辰十二月此年天下諸國疾疫百姓多死始作土牛追大儻（ヒカル）降殺小儻（ヒカル）を逐年

鬼やひとりが追の字やもととくむく雛の字をもおふやひと説く始自禁中迄于何家行也

餘

こうよ慶雲元とせるハ得て續紀を考るに慶雲二年丙午のゆゑ新追雛をたゞやうふとよもやらハ退てから又鬼やひともりより十二月除幕よ大舍人寮方相とほくも熊皮小袴重の四目をつげ朱衣と名稱戈を持て鬼の形をうけて上方相先籠声をうけて戈を以て楯を叩く群やこれをうけて呼つて方相を追て御前及び

かくくとくうなび上人ち棺の肉やく桑弓薙夫して方相を冠くきてはまくのすみてまくハ格子を放ちくらみあし白木燈臺を衝きと丸やうもく抜きばもの地を打ひじ

なとさうぢゆそして屈きてこわらかくからくわくねて追儻の事法すふかへて明らかに

河内ねよハあくまで後事とこまくれどぞとも用あくまやあくねば今ハ略きくかくもそてハ舊き習俗となりぐく周の世よりくわくねくに國よハそれを移すりて新秋の後ハ江家

次第の文を採るく圓音けひよ桑弓桑よあくべ桃あくん蓬矢薙夫あくべ蘆あくんと泥くれよハ文選ニ桃源棘夫くあくぶ本文をくわくべーた不委くかすくをくせし

タテマツルハカヒ

十三丁花

うけや拂拂云う人世中よくなづくつこりくるぬおひあ

才 まゝあるうちかよとおぢにをどうかうせういて大ねう

こまくはくくふてうそのあくらんうめりものをくまくとてまくぬうく 玉の帶く名ぬ

えんやくふくも私云玉帶有文無文九柄あるのまくきく巡方よくうあるく三位已上用之まくよく

四位參淺も用之碼碯帶九柄だくろく石の帶とりふ四位の人用之犀角帶

巡方九柄あり五位用之烏犀帶是八牛角もまくれ六位用之

弄 正二二月申よ清涼扇うて文人をめくて詩を歌り傳せうす事うく主上あくびふ執

岐

公事根源抄云肉扇正

内扇

日

岐

公事根源抄云肉扇正

柄赤色袍えと名モ保元小信西や行ひく後ハ絶くす事一注

根源集記又平治元年正月廿日被行内宴と行ひて保元のめいとぞあい考あ

く

月廿日二ノ中署頭合二はスサ一日廿二日の松子日おあくべばやるむくもそれで一二献の後親

王公卿よ若菜の義をゆふ保元又信西や行ひ侍うへはくううて侍うよくとて私云弄

不よ一匁とてあくうるとれ述あり不審うく

新

肉宴の式西宮記小委くもくう

弄ふよ清涼扇とあるハ又本松原よ仁寿殿とあるをよくう西宮記よ調に寿美

香綾綺殿御簾事仰木工えとくくう公本松原よ子り小あくべばくくとあるハ西宮

記小當子且一二献後女藏人等以若菜義盛玉器就王卿座相分

一二献もあくハ三献の誤小て此上文よ給臣下三献とくうする時のゆかりまく公もね根原の

をうふハサ二の下よたうのこ字あくく祇御うハ脱くうくまく耳毛よ二ノ月中とあるハ

西宮記よ應和二年二月廿日の例あり二月のゆハやくぞまく保元小信西よとあるハ

根源集記又平治元年正月廿日被行内宴と行ひて保元のめいとぞあい考あ

く

よおとくへばくうくう

同

十九新後撫よ扇をくわくがひふうくなでくとハをときよ

丁ウんよとくへつとひむ手をとくとてあす女王のやうよお茶

サねのくくうもくざりくの時あてこの花よつまくはくう引くくつとくもどつゆ

ぶくあくまくいよすべきとあるのふくよみく今うかと女のかたうう

あす女王のくハ射古今うよひう

此女王ハ冷泉院の比はんすり

同

すくじくもくうくけ花びくふとすのや

同

同

根大桂をくうをまくと

桂衣ハ延長式よハ中宮

同

新桂衣ハ延長式よハ中宮

同

の序料小大もとて天音の轍レ小あきりあるを後撰集は二条店の所あるて妙抄
朝だ向と大うちを従まつとるゆゑバ大桂衣てふ名もとやくよりよりあへま
を今原氏のうちをもととるハ 大桂へとゆきまとらうべから

ハクハシノトウノホソトモヘゲル

あそて 二千丁 花筆秦声也世謂蒙恬為之絃有十三象十二月其一以象潤也自一至
方々五大絃と云自六至十中絃と云斗為巾を細緒と云中のわと絃ハ巾也平
調の時ハ二七為宮小く中の絃ハ雙調よちべりをりゆく 義 中のわと絃ハ巾の絆はす
あべー細絃すもねむるにあり中の絆のうつ斗
為巾此この法細たゞ細絆の中の音近やととりふく見付をも音を中のかく
といひゆやがて妙抄傳より 箋 競争ハ大絃四筋中絃四筋細絆四筋合て十二筋此外巾の絆
一筋きもみて細く十三絃中の細絆と云へ花雨抄の説おき人の見せれ幼びある絆中のお
とうと云は矣是回ド

新本居翁著入室小村田光庸といへて説としてみを附よハ矣

さうぞ次の文あまきて為の法よりも巾の絃ハいよく細く又調すも疊涉調の時など巾の
緒ハ神仙調小ありくいよくちきりバ為よりも巾の絃ハいよく絶やもくべる巾をひ
むくと為の法をきれやまとひりふとあきバ大よりびくニ七為ハ宮主とす
調子の主となりて何事の曲かくも此三絆ハ絆の法よりハ格列又澤く半あきりが多く
かきりとすも小平調の時を二七為

平調よお下して回

細巾の絆せよ

かうり 万 平調より絆のせよりするハ呂一越性調へとま律平調れどもタクス成平調
却くともかくべくをうぐせりハ拍一越調の樂あり平調の位ゆく呂のあくべくもく

かくもくとあくもくねりあり
長亨二年十月十日記えらく 圖 此已前のもべ壹越調あくべくもくへせせうる
調あくべく巾の絆がど滅ゆ切ゆてほぐれんぬく疊涉ハさざりうるよ平調ハより絆
かくもくあら調えす紙とちきびくあべらまくる 岷 此段へなぐれんやくあるれ
かくもくとハカムとよ紙調よももくべいりをあら調ゆくと紙調を平調小くべく
なりさておこくとてあべく紙をだらうとよもくべーさてやくらぐせりハ長保樂の
破あくべる紙の紙も指一箇とりかくと紙をひくと弄るの紙よあくさくとばくに金を
かくもくとハりくらべく 次 村田光庸云此往古來誤りとれ案よ一より五よひと大
絆とりい六より十よひと中絆とひ斗より巾小引を細緒といへば紙といへば平調
巾の緒を中の細緒とちくとひながつて中のわととひハ斗為巾の正中紙わとと
ひよひと中とハ上中下初中後あどりふ中の字は義みて為の絆せ事へざらかハ何の曲小
ても二七為の三絆宮よなうて一越調の曲ありハ一越調小あり平調の紙みせば平調り
かくもくと盤涉調ありくとまくの樂の圓す小かく主とある絆
されやかのほりとくべぐれどとハ中のわと紙ハ為の絆よ絶やもじに事をりくと芳鍾
調聖渉調あくめをもとめてハ為の絆されやまくと紙と巴平調小柱をちくべく下くらべく

をうかとく問ふ為の絃より中の絃をうく且調子も整涉調の妙なれど神仙調があり平調の曲あると下無調ありくちをきバ為の絃よりハ中の絃絶やもくべきを答えさるよてく中の字を中の絃をあどりよ中の字をとすとする説と圓ふるて非ありその處が不弁ひるぐとくニセ為の絃宮かくて主よあくまく演く絃ゆくとせよアキテハ一五十の絃徵よあくうてこれもる多くひく絃くその絃もよ比すきを演くともくは仕きバ中の絃よりばして為の絃ありと明らか」廣道云諸抄の説いとせどくへくへく次くかくとせやもあく絃もくとせど予後絃の事小破きをバ煩ち一まきを極て絃徑とある中の字に説をつけて中のやくわがみたゞの中とせよもんはとふかくふ強説あくべしよ何ともいとばへとかくふと中のとふかくもあくばきく平調小ちくじにてほくろくせうを洋くとあくはとあるはもひぐとくほくろくせうハカリあくせせうぞりううまで相子とがむとあくはとあるはとく考あべくあくせうよあくせうとく人ふくづけ決ひばく文の豫備よくくおをつけてあくせうでハ機合とりふくとあくせうびりふくやうたう

うねべ女能人

九三丁 花

采女

采女

采女

采女

采女

采女

采女

がくめをバ采女役送して女能人よほく女能人とのせんのまくよハシテ又脚厨子所小ハ采女のやくをえびて得選とあくべく得選役送して命婦小つゝへ命婦ものせんの典侍少くわくとくとくあぐく帝室の附ハ肉猿司晴清猿をバ采女とせ供びて陪膳のうねべとく机をくくとく事と附小をくびて上薦もあり下薦もありとくの手ハいまめり

采女やうなる事とくちの代よハちくもきぐく又井中人たゞみとくよのおハちく
仕うてくわてくまくあるやうな事とくみの次よや仕く
采女職員令曰采女司正一人掌ル
檢校采女等事佑一人令史一人采部六人使部十二人直下一人又云凡諸氏氏別貞女
皆限年卅以下十三以上雜非氏名欲自進仕者聽其貞采女者郡少領以上姉妹
及女形容端正者皆申中務省奏聞とをもあくと類張國史大同二年五月の下
十一月の下小停諸國貢采女とりくもありバ諸國貢貞アリハ此時小停貞タク
も同書弘仁四年正月の下小制令伊勢國壹志郡尾張國愛智郡常陸國信太郡但馬
國養夫郡貞郡司子妹年十六已上二十已下容貌端正堪為采女者各一人上と見
えよ此等の所よりハあく貞とく延喜中務式凡諸國所貢采女名簿者辨官
經奏下知省訖錄其由送内侍ともタマヒキバ大同ニ停ラム後小まく貞と見
の制あり一や禁秘御抄又陪膳采女尤可然事也近代漸全零落無極尤可有沙
汰事也陪膳采女典侍仰之應和例也云々とてくまハ采女ハ御膳の事小主と仕奉
る女官あり一や禁秘御抄又陪膳采女尤可然事也近代漸全零落無極尤可有沙
汰事也陪膳采女典侍仰之應和例也云々とてくまハ采女ハ御膳の事小主と仕奉
倍と古唇ともからてウネメとひくと花をふもむうねべとかきうりさうハ采女部とあを
切めくくりたまぐ一今ウネメとみのいふ字ふつきく訛毛とあくならく小ひぐくく
けりぐりぐりみうちきの人

九四丁 餘

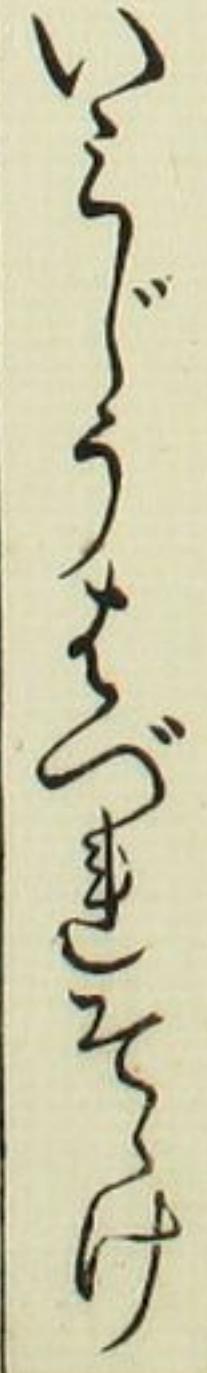
采女

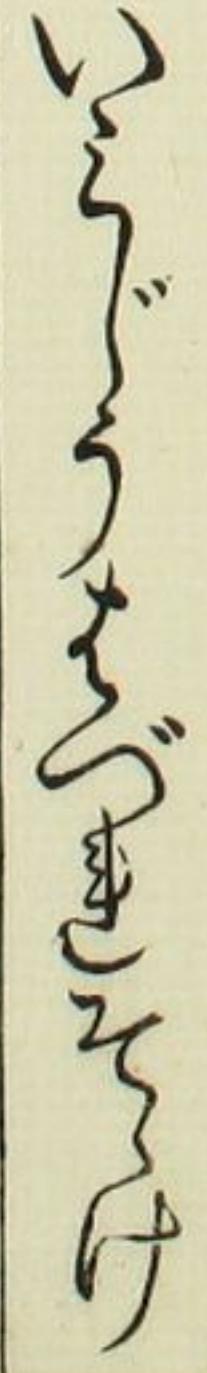
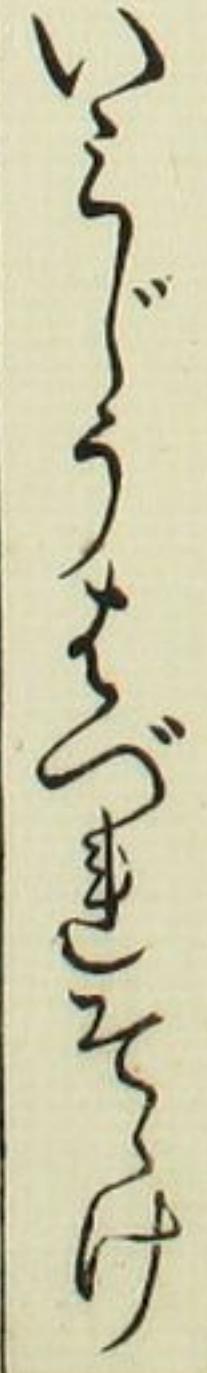
采女

采女

采女

采女

傍梳櫛の人はこゝとくじの筆文は直衣をぬりてあらむ仍てあらむのとひあ
一役云あはれ東を仕立る人くろく門の筆文はむしにほ筆衣をぬりてあらむを
みうちきの人とりふうく **花** 藏人私記十三云御髪御鬢事侍臣之間撰堪事之人供
無定例皆着當色袍 **注** 謂之御桂染紫色絹也納藏人所今あはれゆきりひつひ
あり人此のまぬれあいりをきて祖侯あるをうちきのとハリシ **圓** 見花みうちき
とハキのありとりよ一注或抄古説うら手のみ人とハ向きぬをまとく **佩** 花中内カクモ
とる人とあり又はまくじくめきらる衣文の人とく又はまくじくハ原肉仕立てうちきの人とハ向きぬ
ゆかくもしくんとくとスケヅラゲハ原肉仕立てうちきの人とハ向きぬ
の衣文ユカアル人とへ **新** 業事務人私記小さんもなることあぐり呂拂筆のりあバ固ド
せせふすもまくびきう薄衣を更るハ所てとくめさきバある人めして他へ出させまきんかのあり
且ねくづくづくのは必正衣ハかへすトベー又唐裝のまふ外へ出せりくやでかく入をらき
人も煩ちうるびきすれおうせバ此ぬうちきの人とは狀素の半とくめ説ふるべくもばゆ
国枕冊子よりおひらわくめをせうひく山井のちぬをやられてこうちきにあくを経
ひくかくとくふ様の拂ありよねの内をめタをもあぐもかくされぞとめうとだそ
うりこれもあは状素のまかやくもすゆねよく考ふ爲 **駁** 右の説どもいとあくふ
てキナムツノミツノミツノミツノミツノミツノミツノミツノミツノミツノミツノミツノミツノミ
ヅク **細** その字は固兩義くは時ハ目皮也が表てねる目的皮は白粉あると
くわく **餘** **和名抄** 唐韻云
眞和名万奈加布良目眞也據ふづラの約バ **注** 余りもともよべー目皮の字ハ史記酈生
傳小記 **駁** が居翁著入が云眞マガブラの説可用ブラノ及バニ度を云右の説ども何も
きるするをひとくべく **注** ちくまくするハハドまうり、日の皮くとくめにときね
をやまうどよみてカブラの反ふどあもりくも
足をもくわくとくとく及み萬をどすべく用きなす


牛 毛	牛 毛
牛毛 九 六 才 子 細 才 子	牛毛 九 六 才 子 細 才 子
あへ老のバ目的皮くろく皮入 湖師 もうりく俗よりみまがく 餘 和名抄唐韻云 眞和名万奈加布良目眞也據ふづラの約バ 注 余りもともよべー目皮の字ハ史記酈生 傳小記 駁 が居翁著入が云眞マガブラの説可用ブラノ及バニ度を云右の説ども何も きるするをひとくべく 注 ちくまくするハハドまうり、日の皮くとくめにときね をやまうどよみてカブラの反ふどあもりくも 足をもくわくとくとく及み萬をどすべく用きなす 	あへ老の巴目的皮くろく皮入 湖師 もうりく俗よりみまがく 餘 和名抄唐韻云 眞和名万奈加布良目眞也據ふづラの約バ 注 余りもともよべー目皮の字ハ史記酈生 傳小記 駁 が居翁著入が云眞マガブラの説可用ブラノ及バニ度を云右の説ども何も きるするをひとくべく 注 ちくまくするハハドまうり、日の皮くとくめにときね をやまうどよみてカブラの反ふどあもりくも 足をもくわくとくとく及み萬をどすべく用きなす 

わくべくさんざんバ右の後どもよ従うる河内よりまこと文よハ
七月のよみのとくとりかとくとく。年もうすくちくとく。

おりしやしまく

卅七丁 河伊勢おは二条の后れどもあめの内見てとましき時
ウ 氏神よもうどうひくよこのをつうとけよくじくわきふ
たまやをくみのひもくつてハ神をのまりおりひくよめとてむふハかるとくやらざんゆ
なりひくよくびく万姓ほくよくふんかくう業平リ后よむくとくひくうを今供
してらひかくよくく 花中宮の行啓よハ風輦よもまるく事もあり又庇さうのいとがれまに
来まゆもありあり供奉人行移もあらぬくもまくとく候もあり

○花宴卷餘釋

菊屋のあくわす

一丁 河南殿 櫻云々延喜御記やも群列櫻樹東頭
才 あぐあり天德よ焼くろくを康保元年十一月

小植らすからち枯る四年正月小又植らすく二月よ花あく兩度之写一六重
明親王家樹八西京トテ移植くらす後初し燒亡よ毎度植りく老也湖師拾芥抄云
南殿前庭櫻樹者本是梅也桓武天皇遷都之日所被植也而及承和年中枯失仍
仁明天皇被改樹也云 河花宴事 延長四年二月十七日御記曰此殿前櫻花
盛開仰召文人聊陪花宴昨暮預令召可候文人今日遣使召常陸大守貞真親王
左大臣々々有所煩不參申魁常陸大守親王參入同魁仰藏人立倚子東北庇
自北第二間敷蓋圓座兩三枚於北階南簾子敷為親王納言座櫻樹下鋪座西面
為文人座西魁左衛門督藤原朝臣參入即署倚子令召親王藤原朝臣等即參東侍
座仰令召文人即文章博士公絃朝臣民部大輔博文朝臣右中弁文江民部少輔
諸蔭侍内御書所大内記橘正臣以下文章生以上七人參入仙華門著樹下座侍
臣給紙筆仰令獻題藤原公絳朝臣進昇殿藤原朝臣座前給之令書題目奏花芳
紅瓈珠仰又令上又書奏書之櫻繁春日斜仰以後所上為題又仰令探韵字右近
權少將實賴探韵奉上次親王以下就文臺探韵仰清平朝臣元方在衡維時尹甫
等探韵令就進中座于時内藏寮給酒肴中納言藤原朝臣參入仰令探题其後仰
召樂所管絳者四五人時奏音声以助謳吟及子魁終頭取文臺以公絳朝臣為
講師讀詩仰文人等近侍砌下令構其後管絳頻奏吟詠不止仰常陸大守親王彈

筆中納言藤原朝臣彈琴及互勅給親王納言御衣文人給綿侍臣及樂所人等給
足絹寅二勅入内侍臣退出度々花宴中ニ延長四年例探韵以下尤相似たり。拾送
集天保三年二月内裏より寫させたり。九條右大臣さくふことひもと小内へな
がりかくて手写のまゝを丁々へ也。河内より右の外より延長十七年二月六日康保二年三月五日
同二年二月廿一日才の花宴は例どもを出され候事とまのとハとて今ハ省き。諸物からいそ
ごとく此物候のすは延長の例と近くす。やうべ彼度の例をうりをこよハ筆へり。要くへをすを
えでかがり。筆紫きものと寫すハねがせす。まふふわまりんめあくちくあくよ。あく离脱履
被あるす。ノクシハ皆毛色の名より。此宴をつれきりふのと延長四年の例を引用く。も既破
悟門代のあれ年号あるふ依く。をも面影あり。凡て例一度の例をぢりにけ掲げ。物のあくひ
かれこれをむくえ合せて。もあきべ。細月旨。花相重。附つて既破の事ふあづく。す。ふつさ
てかの内宇小花宴行は。ハ延長十七年三月六日常寧殿花宴詩題春夜観櫻花延長
四年二月十七日清涼殿花宴詩題櫻繁春日斜此兩度の例よりべうしごみふ探韵作文序
遊の事あり。延長の常寧殿は花のまゝも宴席をば清涼殿をみてひくわくこのね。後も
花宴もあくえの様を涉候あくと宴をハ清涼殿よりくとす。すとくとくと
べきこくらく下畠新。或説は此宴南殿の様。お宴とハ申す。と宴席ハ清涼殿にてひくれ
つるとりあひゆる。後く只南殿のまゝとあるふまゝをく宴席もそこよくすと
もかんぞ。直ぐと。況や村上の太陽附南殿のまゝとあるふまゝをく宴席ハ清涼殿にてひく
さば且圓基。すとく。あくとすとく。西もおふとやうとや。さてば宴ハ内宴九日宴。ど
よりハうつく又考の花宴曲水宴。あどよりハねり。あくとすとく。すべて此文ハ必しも古き例よ
も泥まづもくとくべきわざのとと。バ加へてすもくとく。又後のそれあくとくとくとくとくとく

とらひてもぐるも今すまれるもひであらざやとさふをばむつゝかへてとちつとも
とけりよまてぢきも古りて秋きもあへてへべ例あどをぶさうむくにす
あきかくれはあつゝかみの忍りて水の月れたりをちうんとすらがめ此をも
かの相をのみりて依延喜びあよこへすりへるがどりかどにハづくもくぬほり
えんわんじりて

同 花先第一儒者奉御献題次書韵字盛中坛置庭中
文臺上近衛次将先探御料韵二字置管蓋昇自御
文臺上近衛次将先探御料韵二字置管蓋昇自御
前階獻之次王卿堪屬文者文人等各進文臺頭探一字見之奏官姓名及所探韵
字也今業探韵八各字一字侍くことぐく韵字うるく故懷扇端作え春日同賦
春夜觀櫻花各分一字應製詩探得如此まくいづきまく
細新歌ふも右の文を傳すもれく海絶とを今をそと
細恨詩の絶句一首能くべき半はひとゆきとせあるほど時をふああうひうるく明今葉
あるうち詩のよふあうじ立ゆく探韵始く時を退をりよるや湖歸
也一玉補今叶の内説うやもとくとせあるほど時をふああうひうるく明今葉
をうけくよげくハ上のもぐりくくてともうくあくとをうけくる
細湖歸の内説よじ
四葉の義ひづくをく絆くてうけ説ともうく地の文人筆者あまの筆者一とくかくる
方小やんとくかひ人お同物あふひすくよまでもぐりくて云くとくのまくやもとくあれどハ
吳かくやもきば。のゆかれとくあくよううくてハづく探韵始く時のを退をりよやとく安
えくよく一曲の内説よじと易きやどのかくとあしとくつよことなるをややとく三まい写脱と如く
甚ぞ多くつとくあまひ

同丁河南宮横笛譜云昔善儻此曲者有左大臣源
ウ信朝臣及巨勢式人等乃兼和御時勅信朝臣

以此曲令傳習畢成康親王合于御
笛傳於清涼殿前視之者無不感泣

柳花死

同 築

聞云大唐小人の死する時ある
かく手を仰そと葬送の時これを

棺擣をひきされば彼死人瘞すとこそ下りて吉の事より即ち仰りたり云々

えやべ三丁河或況云廣才の人殺害を仰よりて謹師もスドミヤマツテ秋云今來此發る甘
才人之宴の謹師を仰ともるども殺害を仰る人數字を石謹师乎品遠きあるを毎日トモニ

謹のあとは乞候裏每句遠きある各感ぜるそ謹頃中未もゆぬ佛之又本謹師も又云
やうと云ぢあと謹師も一へられてアシ物ればどうぞりと云ひあはれづく

さうのをあやまつされと今ハきみがびくびく
微月妙のやよはううーりえうめらばもあり

ああすすねを爰までつとをそとあぐともすす ゆね更れ

小夫君よ御くすのつとをそとあぐせよせよせめゆもかくん

花きこえびぐるとのふ詞を源氏の君はゆきとわ妻を女のうだべてひときよあべいとす
まくまくうやて草はれ原をとくとやどみみへる之源氏のゆはるあむきもとへなりゆ

ばよみとぞれどもれあのやどりをとどんやどもあれんやせしろゆこうきよりそたにふ
なおりうとひもすうふるそとひあくのつまれてあるとふんを下のぎよのべゑり小ゆがゑ

風もとをかけあのやどりをとえしあかべひれこよくとくおむととくかくひとほけ詞もと
ほけたらハ二条のあくのわたりよづくともく事年小ゆくゑの風またくふるへ

云釈あるあと

てハありあられそきものふんを下のすみがくととひとくき深なりぬりハ水原抄ア

活りそあぐるを河海養など皆この樂を改めちとくとす和光ちは既の樂のあきとどり即ちとく

本居先生の玉小機小注よりも然ことを考へがよひつてひもん又それゆてがもとへも
あひよびとあう實小坡流のやうにモドリ給あくゆくられ今ハ法説をあげば
けくのえびくぬ 九丁花今按櫻のうじや面白いとすと今按らむるふうゆう月を
う かきたくらきまきはきのまをがきて月をくたうたう第

このじれは私きすうちうてのうなふ流蟲と月といたとくへ花やまくつる不寛

一本ニ空がゆひとありま表紙小ちねへ写すおとまれる河清少納言櫻草子がまわい紀もの

二重よみの崩玉空ふちうあればあすとあつて云

釈 櫻のえびくぬよひとすま表紙小ちねへだあがり

ととのえびくぬけむり 十十

雅集 万代朝をもかと等登能倍続日本紀 四此天下平治賜北諧賜北源奏ハさうぞ
人のあをゆゆくとくのへりとりゆくゆゆゆ同九かじらすがくまくとくのへてヨウタヒミ

づとくのへりとて画合ニをもねじとじもは櫻のあくらあぐのまくじねまくじく

とくのへせびくぬ 釈 俗おひおゆくゆのじまくのじを食きとけ氣あてけきをつまく

うむ 十一丁弄 好ひおむを給ふも出づへぬもおせかふ上手をもくづり出づへと

キモと一ひかへゆ一ゆると釈 おも養もも圓一櫻のまろこ河海少へおやけととかもし

しよはり出づれどもまよゆとおくと按小細流弄花などお好と記されらる河海の邊ハスお

たとふやをかへと。うむとまよゆへと。へ秀字などおも養ももくもと。へお字

あん後考へ

○花余尺

召殿上公卿預召立書別如例御賭物臣下賭細今年右大臣の踏哥後宴あり之私
宴例考細よりあり鷺喜後宴あるもとつりあり一劫定おるやあらば藤花の時の事あ
せばうむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
く私小弓甚有一毛無一毛無故せよ。一毛無事はいふり故教かのやうは無と拘りけふ
冠二重よしめくやせももじりに山の毛無しとて経へあゆくもせきをくらひま西一言聞同
わきせもひそ引りに山の毛無しとて経へあゆくもせきをくらひま西一言聞同
かく入山は小さむとての花の毛無しとて経へあゆくもせきをくらひま西一言聞同
まわびせよれとく款細まべて口せ花の毛無しとて経へあゆくもせきをくらひま西一言
うれすぬや魯聞の説とて弓をくらひ花教をのやくとあも
えふからりばひぐゑとて左大臣の方をてあしろに詠みど花
廿日典日左大臣飛香舍うほの物語云中の中の十日うちおあら井比奈小弓の花の望し物花
おみ幸小なずくて左大臣の第にて花の宴あり又天慶三年四月十日飛香舍藤花宴小弓
管結等女みとたち女みと花十二丁細淨と左大臣と傳中よりくねりついでがくと・もくしき
あつウ一ノへと教訓あくく門の傳子ウだくと弘徽殿
ちれいがくあづのやくおがくまきとく弄同玉細みとあく姫家らのとくすあれどこくお
をとくふちい右大臣の内もすくらねりとくまえくれ源氏の姫妹とくらふれど
せよくば玉浦細小様おととあねてあん天子はのふをとこの後すくやあやいとあがつむか
細流小源と左大臣と傳子ウとくに教訓あくとあくさく玉小様なき玉小様補きふせく
えゆくう外へ花の予と花模のからせきのちなる同河細唐詩花十三丁河からせきとく唐詩花
みととウさまできりウさまできりウ十三丁河からせきとく唐詩花十三丁河からせきとく唐詩花
扇をぞらひて同河細伊之加波乃ウ云く源氏傳と
うれすをとせよせてさきへだる高麗人ウ捨細催馬樂石川の事云々故聞書石川と
かくはとせよせてさきへだる高麗人ウ高麗人ウ今按鴨川と石川や岸の小川との事の加筆の繰起を
もて其の事とてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされと
てよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされと
てよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされと
伊利斯沙禮斯也大狗連出自高廉溢士福貴生也鳴木高麗國伊理和須使主之後也
うれすと石川郡小れうれうれと張きて其後者もものまほのあと取うてたらむうとくわや因源
氏の居あきのゆとあんたのちくわや石川の事とくふねじとくふねじとくふ
とあきとくふねじとくふねじとくふねじとくふねじとくふねじとくふねじとくふ
あきとくふねじとくふねじとくふねじとくふねじとくふねじとくふねじとくふ
せりうれうれき物の結婚の詞ねりふくに筆をせりうれうれき物の筆を
たふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふく

布被事とて例を多く舉られれどきのみにて今ハ悉く省く本書とてよぶ花六条院細の
かくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとく
狹物濃小二不取れどきよ細袖にあどくうけたれをウ十四丁花常花物語小枇杷殿細道長の大饗食小女房の袖にあどく
きの袖はくけり云くウ十四丁花常花物語小枇杷殿細道長の大饗食小女房の袖にあどく
かくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとく
わくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとく
路細今かくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとくはとくのとく
うれすをとせよせてさきへだる高麗人ウ捨細催馬樂石川の事云々故聞書石川と
かくはとせよせてさきへだる高麗人ウ高麗人ウ今按鴨川と石川や岸の小川との事の加筆の繰起を
もて其の事とてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされと
てよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされと
てよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされと
てよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされとてよされと
伊利斯沙禮斯也大狗連出自高廉溢士福貴生也鳴木高麗國伊理和須使主之後也
うれすと石川郡小れうれうれと張きて其後者もものまほのあと取うてたらむうとくわや因源
氏の居あきのゆとあんたのちくわや石川の事とくふねじとくふねじとくふ
とあきとくふねじとくふねじとくふねじとくふねじとくふねじとくふねじとくふ
あきとくふねじとくふねじとくふねじとくふねじとくふねじとくふねじとくふ
せりうれうれき物の結婚の詞ねりふくに筆をせりうれうれき物の筆を
たふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふく

〇二、三十三終

文
獻
堂
藏
版

皇漢洋洋古書類自家積年發光セル者ト其集
藏啻ニ充棟載車ノ夥キノミナラズ品位精工價
程清廉以テ四方君子、愛顧ヲ待ツ

東區南久寶寺町四丁目十九番屋敷

前川善兵衛

阪府書林

